

# 学部・研究科等の現況調査表

## 教 育

平成22年6月

山形大学

## 目 次

12. 地域教育文化研究科	12- 1
13. 教育実践研究科	13- 1

## 12. 地域教育文化研究科

I	地域教育文化研究科の教育目的と特徴	12-2
II	分析項目ごとの水準の判断	12-3
	分析項目 I 教育の実施体制	12-3
	分析項目 II 教育内容	12-7
	分析項目 III 教育方法	12-16
	分析項目 IV 学業の成果	12-22
	分析項目 V 進路・就職の状況	12-24
III	質の向上度の判断	12-25

## I 地域教育文化研究科の教育目的と特徴

### ○教育目的

地域教育文化研究科は、地域教育文化学部に基づき置く大学院として平成 21 年度に設置された。本研究科は、臨床心理や芸術及びスポーツなど文化各分野において個々のスキルアップのみならず、文化的・精神的に豊かな地域の再生・発展に貢献できる高度な専門の知識を養い、社会全体の健全な発展向上に資するリーダーたる人材を養成することを目的としている。

上記の目的を達成するため、本研究科では以下を具体的教育目標としている。

1. ころのケアに関する高度な業務を担うことができる人材の養成  
「臨床心理学専攻」では、精神科病院等の臨床心理業務や中学校のスクールカウンセリング、児童相談所の心理判定、児童養護施設における被虐待児の心理療法など、ころのケアに関する高度な能力の育成を目的とする。
2. 地域の音楽芸術文化の発展・振興に貢献できる人材の養成  
「文化創造専攻・音楽芸術分野」では、音楽専門分野で地域における指導的な役割を担う人材を育成し、加えてオペラ、室内楽、オーケストラを教育の中心に据え、企画・運営・実践を通してコーディネート能力とマネジメント能力の育成を目的とする。
3. 地域や社会の造形芸術文化の発展・振興に貢献し得る人材の養成  
「文化創造専攻・造形芸術分野」では、絵画・彫刻、工芸・デザイン等の各専門領域において高度な専門的な技能と指導力を養成する。また文化政策やアートマネジメントに関する実践的な能力の育成を目的とする。
4. 生涯スポーツ社会構築を積極的に推進できる人材の養成  
「文化創造専攻・スポーツ科学分野」では、各種スポーツの技術や先端理論等を修得し、競技力向上の指導者を目指す人材を養成するとともに、スポーツ活動を企画する能力、地域社会や行政並びに各種スポーツ団体等と有機的に連携し協働できるスポーツ・コーディネート能力とマネジメント能力の育成を目的とする。

### [想定する関係者とその期待]

本研究科の関係者と考えられるのは、地域社会において、臨床心理学など心理学の知識や諸技法を活かし、「ころのケア」に関わる分野での貢献を目指す学生、また、音楽芸術、造形芸術、スポーツ科学の3分野において、芸術文化やスポーツの発展・振興に関わる指導者を目指す学生と、このような人材を必要とする臨床心理関連施設等、文化・スポーツ施設等、学校・教育関係機関、自治体、NPO、NGO、文化団体、一般企業などである。

なお、地域社会とは東北地方のみならず、それぞれの地域社会を考えている。

関係者からの本研究科への期待は、以下のように考えられる。

学校など教育現場での児童生徒の不登校や問題行動等の対応に当たって、学校におけるカウンセリング等の機能の充実を図ることが重要な課題となっているため、各都道府県・指定都市においては、児童生徒の臨床心理に関して高度に専門的な知識・経験を有する「スクールカウンセラー」が求められており、その養成が本研究科に期待されている。

また各地域における文化の活性化の促進が求められているが、スポーツ、音楽・芸術の継承・発展・創造を担う人材の不足が指摘されている。高齢化社会が到来し、健康を維持し、豊かな人生を広げるために、音楽・造形・スポーツなどの生涯学習の有用性が強調され、人々の生涯学習に対する希望があり、その指導者の養成が本研究科に対して期待されている。

## II 分析項目ごとの水準の判断

### 分析項目 I 教育の実施体制

#### (1) 観点ごとの分析

##### 観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

山形大学大学院の目的【資料 I-1】及び地域教育文化研究科の目的【資料 I-2】を達成するため、本研究科には専門分野に応じて、「臨床心理学専攻」と「文化創造専攻」の2専攻を設置し、文化創造専攻は、「音楽芸術」、「造形芸術」及び「スポーツ科学」の3分野で構成している。これらの組織編成は、研究科及び各専攻、分野の人材養成上の目的【P.2に示す】と適合している。

##### 【資料 I-1】山形大学大学院の目的 [山形大学大学院規則 第1章(趣旨)第2条より]

本大学院は、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究め、又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与することを目的とする。

##### 【資料 I-2】地域教育文化研究科の目的 [山形大学大学院規則 第2章(組織)第4条より]

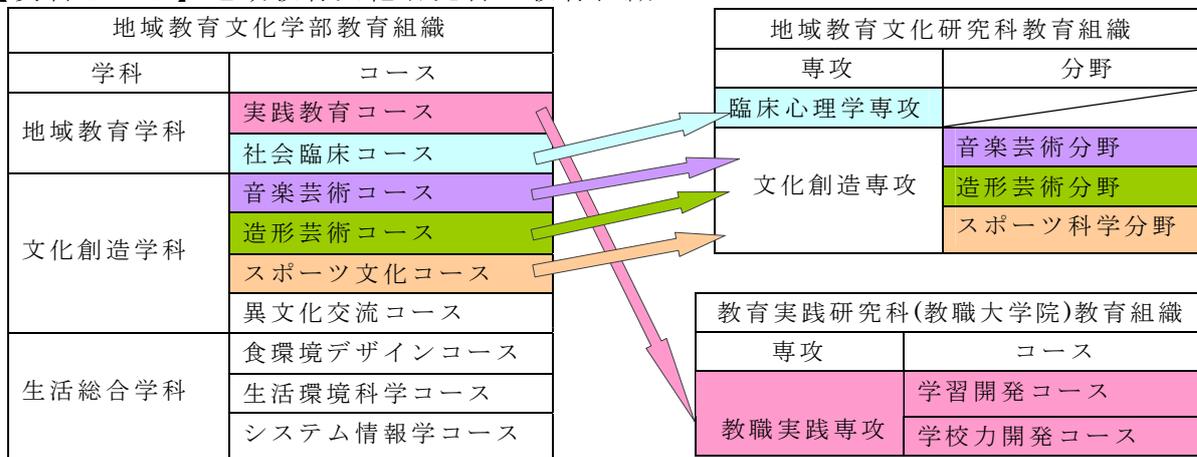
専攻分野における学識を深め、実践的な問題解決能力を付与するとともに、知識・技術を総合的に駆使することができる高度な専門性を修得させる。

もって、地域の人々の豊かな文化的・精神的生活の維持・向上を促進し牽引する人材を養成することを目的とする。

地域教育文化研究科は、「地域教育文化学部」の2学科4コースに基礎を置いている。本研究科と同様平成21年4月に開設した「教育実践研究科(教職大学院)」と学部との関係は【資料 I-3】に示すとおりである。

次に【資料 I-4】に、各専攻・分野の教育研究分野及び修得できる学位の種類を示した。また、各専攻・分野の入学選抜区分、入学定員、平成21年度入学者数(現員)、及び充足率等詳細は【資料 I-5】に示すとおりで、定員を十分満たしている。また、各専攻の教員配置数及び、教員一人当たりの学生数を【資料 I-6】に示す。

##### 【資料 I-3】地域教育文化研究科の教育組織



## 【資料 I - 4】

地域教育文化研究科 教育研究組織			
専攻	分野	教育研究分野	学位の種類及び専攻分野の名称
臨床心理学専攻		臨床心理学、発達心理学、家族心理学、教育相談、生徒指導、児童精神医学	修士(臨床心理学)
文化創造専攻	音楽芸術分野	声楽、器楽、作曲、指揮法、音楽学、音楽科教育	修士(学術)
	造形芸術分野	絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術史、美術理論、美術科教育	
	スポーツ科学分野	スポーツ学、運動学、スポーツ生理学、スポーツ教育、スポーツ工学、武道論	

## 【資料 I - 5】 各専攻の入学定員、入学者数、及び充足率

専攻	分野	選抜区分	入学定員	入学者数	充足率
臨床心理学専攻		一般選抜	6	5	116.7%
		社会人特別選抜		2	
		外国人留学生特別選抜		0	
文化創造専攻	音楽芸術分野	一般選抜	8	2	137.5%
		社会人特別選抜		2	
		外国人留学生特別選抜		0	
	造形芸術分野	一般選抜		2	
		社会人特別選抜		0	
		外国人留学生特別選抜		1	
	スポーツ科学分野	一般選抜		4	
		社会人特別選抜		0	
		外国人留学生特別選抜		0	
合計			14	18	128.6%

## 【資料 I - 6】 各専攻の教員配置数及び教員一人当たりの学生数

専攻	分野	教員配置数						* 学生数	* 教員一人当たりの学生数*
		研究指導 教員数	研究指導 補助教員数	小計	兼任教員	兼任教員	合計		
臨床心理学 専攻		4	2	6	3	4	13	7	0.54
文化創造 専攻	音楽芸術分野	6	0	6	0	5	11	4	0.36
	造形芸術分野	6	0	6	2	3	11	3	0.27
	スポーツ科学分野	2	6	8	1	1	10	4	0.40

\*：学生数及び教員一人当たりの学生数については、平成22年2月末時点、即ち第1学年のみの数値となっている。

<b>観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制</b>
----------------------------------

(観点に係る状況)

本研究科では、教育内容及び方法に関しては、研究科運営委員会の学生指導担当委員を中心に取り組んでいる。教育内容及び方法等の改善に関しては、「教育活動に関する点検・評価」として「授業改善アンケート」を実施し、その結果を調査報告書にまとめ、各指導教員にフィードバックして、次年度以降の授業改善に反映させることとしている。なお、この授業改善アンケートは、学部の授業アンケート実施作業部会が中心となって実施しているものを、研究科に即した内容に整理し実施しているものである。また、「履修の手引き」、「授業時間割」、「シラバス」を作成して、教育内容を広く公表している。

さらに、【資料 I - 7】に示すとおり、学生と教員が授業改善について話し合う授業懇談会や FD 等も実施している。また、平成 21 年 7 月に実施した本研究科の授業改善アンケートの設問項目、アンケート実施概要、改善すべき点、不満・要望の記載例等、分析結果を以下【資料 I - 8 ~ I - 11】に示す。学生からのこれらの改善要望については、授業担当者がそれぞれ分析・認識するほか、施設・備品の改善等については、予算措置などの対応を行い、次年度以降の授業改善に反映させる。

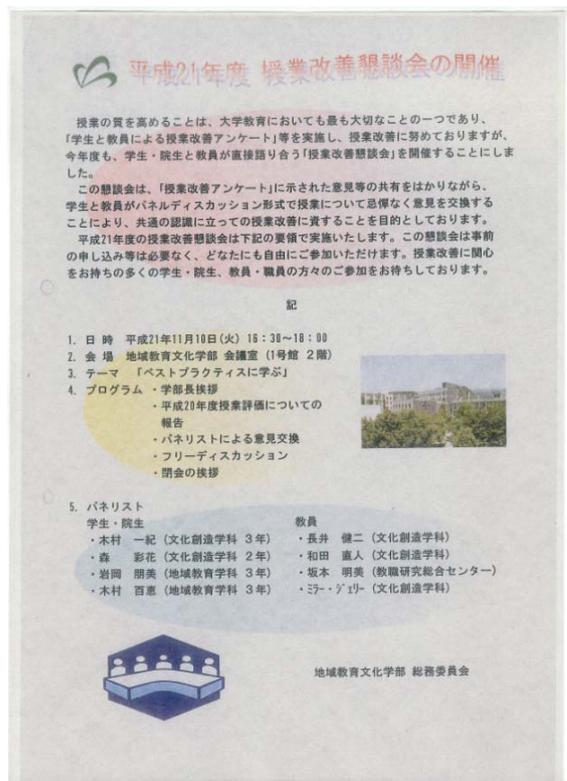
**【資料 I - 7】 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制 (平成 21 年度)**

取り組み	統括責任者	実施時期・回数等	概要	目的・期待される効果	備考
(1) 授業改善アンケートの実施	研究科運営委員会の学生指導担当委員	前期及び後期各 1 回	学生による項目別授業評価と教員へのフィードバック	アンケート結果をふまえた教員の授業改善	
(2) 授業改善懇談会の実施	研究科運営委員会の学生指導担当委員	平成 21 年 11 月 10 日	授業改善に関する学生とのパネルディスカッション	学生との共通の認識に立った上での授業改善	地域教育文化学部との共同実施、本研究科長 井健二教授、和田直人教授がパネリストとして参加
(3) 山形大学 FD シンポジウム「学生主体型授業の探究—学生の意欲と主体性を育てる授業を考える—」の実施	高等教育研究企画センター	平成 21 年 12 月 12 日	「大学院における学生参画授業—ラベルワークを活用して—」 日本教育大学院大学 林 義樹教授 丸山智史・佐々木美紗・小山裕美	外部講師の講演による教員の授業改善	山形大学高等教育研究企画センター主催、FD ネットワーク“つばさ”共催

この部分は著作権の関係で掲載できません。

この部分は著作権の関係で掲載できません。

「大学院における学生参画授業—ラベルワークを活用して—」  
 日本教育大学院大学 林 義樹 教授  
 丸山智史・佐々木美紗・小山裕美



平成21年度授業改善懇談会

【資料 I - 8】 授業改善アンケート設問項目

設問項目	
①	この授業で良くなかったと思う点、改善すべき点を書いてください。
②	教室、施設、設備について不満・要望等があれば書いてください。
③	この授業について意見・要望等があれば書いてください。
④	この授業で良かったと思う点を書いてください。
⑤	この授業を総合的に判断すると良い授業だと思いますか。どれかに○を付けてください。(5 から 1 までに○を付ける)。

【資料 I - 9】 アンケート実施概要

授業実施時期	平成21年7月中旬及び平成22年1月中旬
開講授業科目数	32科目
アンケート回答科目数	24科目
アンケート回収率(回答数/受講者数)	75%

【資料 I - 10】 設問① 良くなかった点、改善すべき点の主な内容

改善項目	延べ人数	主な内容
授業の進め方	16	ディスカッション形式ではないので、主体的に自分自身が参加できなかった。
授業内容	2	スポーツ、音楽、造形で共通のテーマがあった上で講義していただけるとさらにまとまりがあった。
授業日程	2	夏休みに入り込んだ日程。

## 【資料Ⅰ－11】 設問② 教室、施設、設備について不満・要望の主な内容

改善項目	延べ人数	主な内容
冷房設備	10	冷房のない教室で、暑さが辛かった。
パソコン	5	SPSSがきちんと動くパソコンがもっと台数があればよかった。
その他設備	3	造形芸術コースの教室や作業スペースが足りない。

## (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

本研究科は、教育目的に応じた専攻・分野を設定し、教員配置も教育や研究に相応しい体制となっている。入学者選抜の方法は、一般の大学卒業生、社会人、留学生の区分で実施され、定員も確保されている。

教育方法の改善は、研究科運営組織が、教育内容、教育方法の改善に取り組む体制が整っている。学生への授業改善アンケートを通して学生個人の関心や課題を授業に取り入れている。また、授業改善懇談会及び山形大学FDシンポジウムなどを通して、より客観性のある視点から積極的に授業改善を行っている。

以上のことにより、期待される水準を上回ると判断される。

## 分析項目Ⅱ 教育内容

## (1) 観点ごとの分析

## 観点 教育課程の編成

(観点到に係る状況)

本研究科では、修士(臨床心理学、学術)の学位を授与するのに相応しい教育課程を編成しており、修了に必要な単位数は【資料Ⅱ－1～Ⅱ－2】に示すとおりである。

文化創造専攻では、各分野の養成目的に照らし専門的な知識・技能を系統的に学ぶとともに、人間文化全般に貫く高い倫理観を涵養するために「生涯学習特論」を、また文化に関する実践力を涵養するため「文化コーディネータ実習」を必修とするほか、文化に関する総合的な広い視野の獲得に資するため、他専攻・他分野で開講される「総合連携科目」【資料Ⅱ－3】の履修を義務付けている。

## 【資料Ⅱ－1】〈臨床心理学専攻〉大学院修了に必要な単位数 (大学院履修の手引き)

区分 専攻	必修科目		選択科目					計	合計
	臨床心理に関する必修科目	課題研究	A群	B群	C群	D群	E群		
臨床心理学専攻	16単位	4単位	2単位	2単位	2単位	2単位	2単位	10単位	30単位

臨床心理に関する必修科目(16単位)及び課題研究(4単位)と、選択科目(A, B, C, D, E群から各2単位、計10単位)で構成されている。選択科目には、心理学の基礎を修得する科目と大学院修了後の進路に必要とされる臨床的な科目をバランス良く配置している。

## 【資料Ⅱ－２】〈文化創造専攻〉大学院修了に必要な単位数

(大学院履修の手引き)

分野	必修科目			選択科目		計
	専攻必修科目	分野必修科目	特別研究 I・II	分野選択科目	総合連携科目	
音楽芸術分野	4 単位	10 単位	8 単位	6 単位	2 単位	30 単位
造形芸術分野						
スポーツ科学分野						

3分野共通で、専攻必修科目(4単位)と分野必修科目(10単位)と特別研究 I・II(8単位)、及び選択科目(8単位)で構成されている。選択科目は分野で開講される選択科目から6単位、他専攻・他分野で開講される総合連携科目から1科目2単位を選択し履修する。また履修科目の特徴として、専門領域における技術・技能のスキルアップや専門性向上を実現する科目群の段階的配置と、「文化コーディネート実習」を中心とする応用・実践的科目を配置している。

## 【資料Ⅱ－３】総合連携科目

開講する専攻・分野	授業科目	単位数	選択	週 授 業 時 間 数				備 考
			総合連携	1 年次		2 年次		
				前	後	前	後	
臨床心理学専攻	発達心理学特論	2	1 科目 2 単位 以上を 履修	2				
	大脳生理学特論	2		2				
	犯罪・矯正心理学特論	2		2				
文化創造専攻 音楽芸術分野	音楽活動支援論	2		2				
	室内楽演習(声楽)A	2		2				
	総合舞台芸術演習(オペラ)A	2		2				
文化創造専攻 造形芸術分野	伝統文化論	2		2				
	地域デザイン特論	2		2				
	芸術と文化政策	2		2	2			
文化創造専攻 スポーツ科学分野	現代スポーツ論	2		2				
	スポーツ政策論	2	2					
	地域スポーツ文化論	2	2					

総合連携科目は文化創造専攻の学生が、所属分野以外の臨床心理学専攻及び他分野の総合連携科目群から1科目2単位以上を履修するものとする。

加えて、2つの専攻の教育課程表を【資料Ⅱ-4～Ⅱ-5】に示す。

【資料Ⅱ-4】臨床心理学専攻の教育課程表

(大学院履修の手引き)

科目区分	授業科目	単位数	必修	選択	総合連携	週授業時間数			
						1年次		2年次	
						前	後	前	後
臨床心理学に関する必修科目	臨床心理学特論 A	2	必			2			
	臨床心理学特論 B	2	必				2		
	臨床心理面接特論 A	2	必			2			
	臨床心理面接特論 B	2	必				2		
	臨床心理査定演習 A	2	必			2			
	臨床心理査定演習 B	2	必				2		
	臨床心理実習 初級	2	必			2			
	臨床心理実習 上級	2	必					2	
選択科目	A群	心理学特別演習 (統計)	2		選		2		
		心理学研究法特論	2		選			2	
		心理学特別演習 (実験)	2		選			2	
	B群	発達心理学特論	2		選	★	2		
		学校心理学特論	2		選		2		
		大脳生理学特論	2		選	★	2		
		行動心理学特論	2		選		2		
		教育心理学特論	2		選			2	
	C群	家族心理学特論	2		選			2	
		犯罪・矯正心理学特論	2		選	★	2		
	D群	精神医学特論	2		選		2		
		障害児心理学特論	2		選		2		
	E群	心理療法特論	2		選		2		
		投映法特論	2		選			2	
		学校臨床心理学特論	2		選			2	
		学校カウンセリング演習	2		選			2	
		コミュニティ・アプローチ演習	2		選				2
必修科目	課題研究Ⅰ	2	必			2			
	課題研究Ⅱ	2	必					2	

【資料Ⅱ－5】文化創造専攻の教育課程表

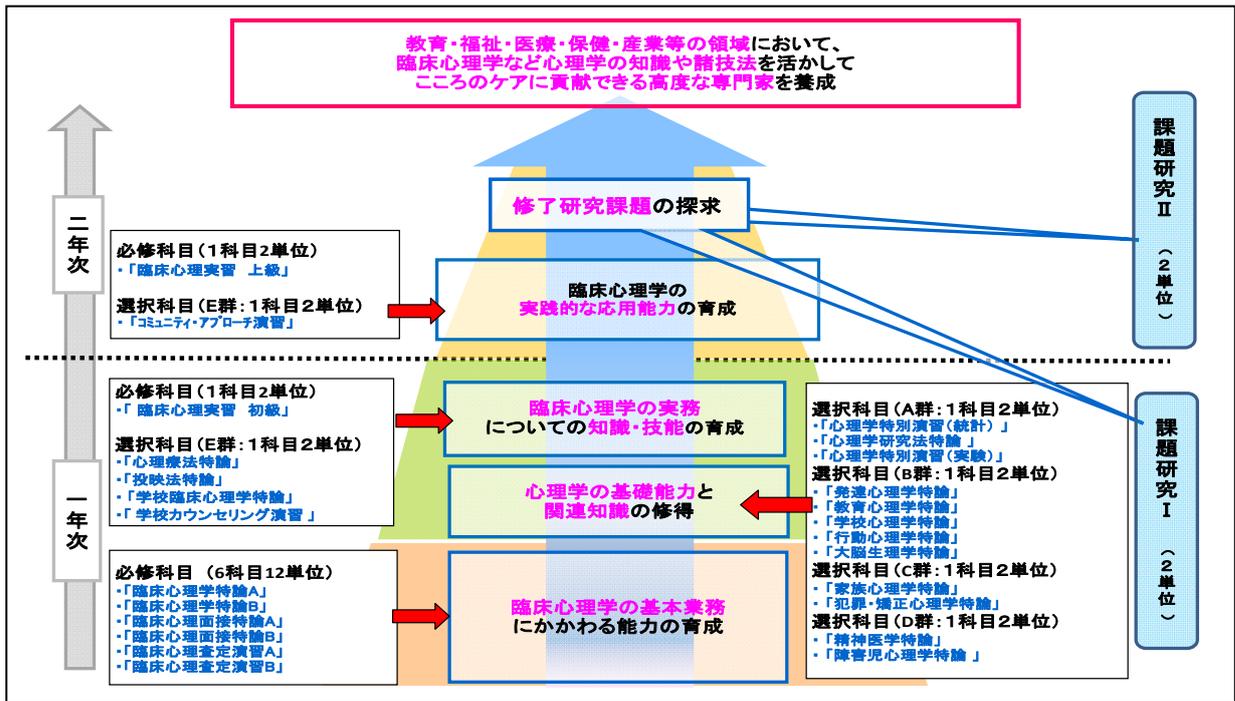
(大学院履修の手引き)

分野	授業科目	単位数	必修	選択		週授業時間数			
				分野 選択	総合 連携	1年次		2年次	
						前	後	前	後
専攻共通	生涯学習特論	2	必			2			
	文化コーディネート実習(音楽)	2	必					2	
	文化コーディネート実習(造形)								
	文化コーディネート実習(スポーツ)								
	特別研究Ⅰ	4	必			4			
特別研究Ⅱ	4	必						4	
音楽芸術分野	音楽表現演習(声楽)A	2	☆必			2			
	音楽表現演習(ピアノ)A	2	☆必			2			
	音楽表現演習(管弦打)A	2	☆必			2			
	音楽表現演習(作曲)A	2	☆必			2			
	伝統音楽論	2	必			2			
	音楽活動支援論	2	必		★	2			
	室内楽演習(声楽)A	2		選	★	2			
	室内楽演習(器楽)A	2		選		2			
	総合舞台芸術演習(オペラ)A	2		選	★	2			
	日本伝統音楽文化演習A	2		選		2			
	音楽表現演習(声楽)B	2	☆必				2		
	音楽表現演習(ピアノ)B	2	☆必				2		
	音楽表現演習(管弦打)B	2	☆必				2		
	音楽表現演習(作曲)B	2	☆必				2		
	総合音楽学	2		選			2		
	音楽振興支援論	2		選			2		
	室内楽演習(声楽)B	2		選			2		
	室内楽演習(器楽)B	2		選			2		
	総合舞台芸術演習(オペラ)B	2		選			2		
	日本伝統音楽文化演習B	2		選			2		
総合舞台芸術実習(オペラ)	2	必						2	
造形芸術分野	絵画・版画表現演習	2	必			2			
	彫塑・立体表現演習	2	必			2			
	デザイン方法論	2	必			2			
	美学・芸術学特論	2		選		2			
	デザイン表現演習	2		選		2			
	造形芸術教育特論	2		選		2			
	伝統文化論	2	必		★	2			
	地域デザイン特論	2		選	★	2			
	地域産業開発演習	2		選		2			
	美学・芸術学演習	2		選			2		
	平面造形演習	2		選			2		
	立体造形演習	2		選			2		
	デザイン・プロジェクト演習	2		選			2		
	芸術と文化政策	2		選	★		2		
	アートマネジメント論	2	必				2		
	地域デザイン演習	2		選			2		
	地域伝統造形演習・鍍金	2		選			2		
デザイン・マネジメント演習	2		選					2	
スポーツ科学分野	現代スポーツ論	2	必		★	2			
	生涯スポーツ論	2	必			2			
	スポーツ政策論	2	必		★	2			
	地域スポーツ文化論	2		選	★	2			
	スポーツ生理学	2		選		2			
	スポーツメンタルマネジメント論	2		選		2			
	地域スポーツ指導論	2		選		2			
	スポーツ工学論	2		選		2			
	健康スポーツ論	2		選		2			
	スポーツ教育法Ⅰ	2		選		2			
	スポーツ史演習	2		選			2		
	伝統スポーツ論	2	必				2		
	ヘルスプロモーション演習	2		選			2		
	生涯スポーツボールゲーム論	2		選			2		
	スポーツバイオメカニクス演習	2		選			2		
	アウトドアスポーツ演習	2		選			2		
	スポーツ教育法Ⅱ	2		選			2		
	生涯スポーツマネジメント演習	2	必						2

1. ★印：総合連携科目は所属専攻・分野以外の★印科目から1科目2単位以上を履修する。  
 2. ☆必：音楽表現演習(\*\*\* ) ABについて1科目を必修とする。

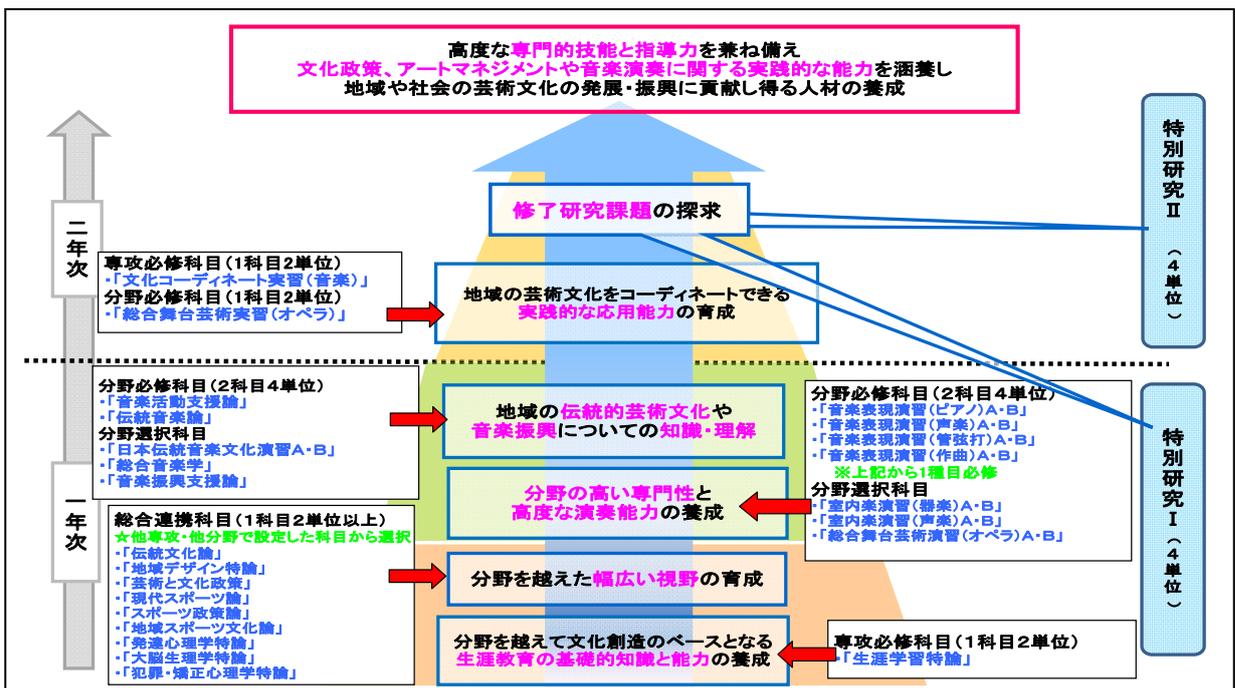
臨床心理学専攻では、臨床心理士の基本業務に関わる授業科目を必修としている。また、地域の中で様々な職種の者と共同して柔軟に問題解決をはかることができる実務遂行能力と倫理性が求められるために、臨床心理学に関する特論と組織的計画的な実習を必修としている。なお、選択科目には、学校でのスクールカウンセラーや児童相談所などの心理判定員向けの授業科目、精神科領域等の心理的ケアの方法論に関する実践的講義などを設け、選択して修得できる。その履修イメージを【資料Ⅱ－6】に示す。

【資料Ⅱ－6】履修イメージ（臨床心理学専攻）



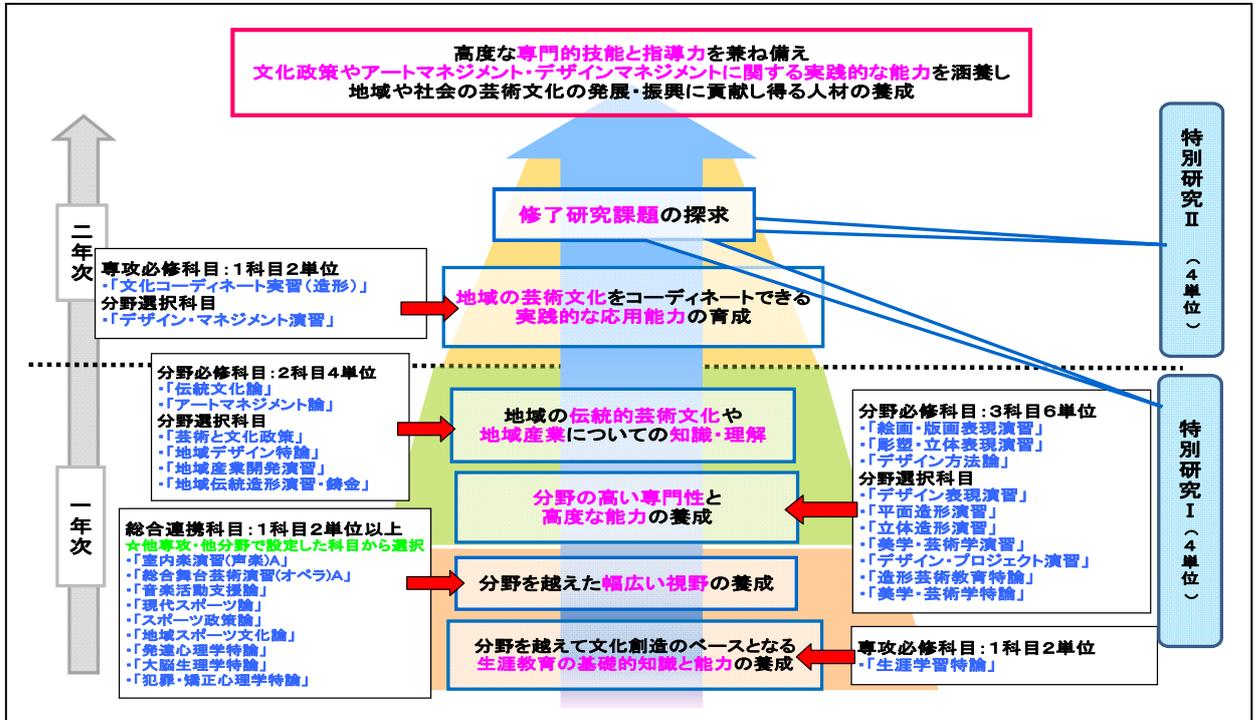
音楽芸術分野では、音楽芸術に関する学理と表現技法を研究するために「声楽」、「鍵盤楽器」、「管弦打楽器」「作曲」、「生涯音楽」及び「指揮法」の各研究分野に則った授業科目を配置し、研究・教育を行っている。その履修イメージを【資料Ⅱ－7】に示す。

【資料Ⅱ－7】履修イメージ（文化創造専攻 音楽芸術分野）



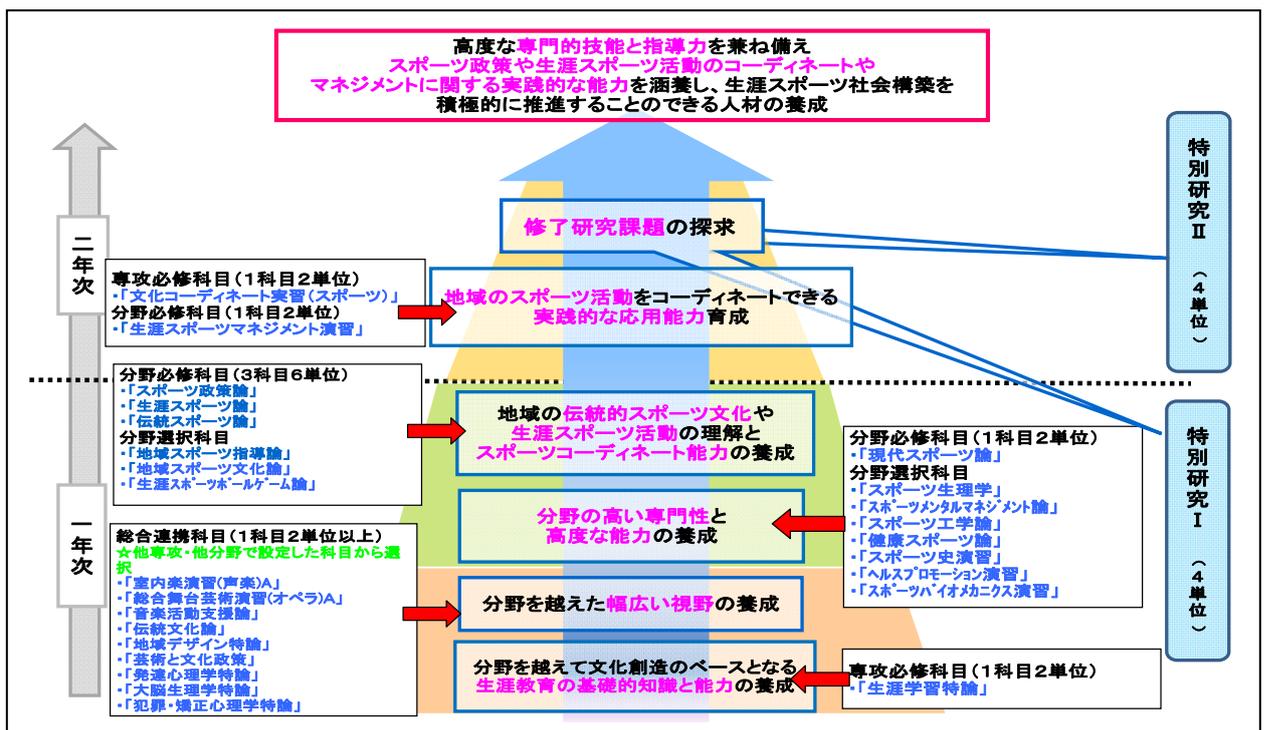
造形芸術分野では、版画・絵画、彫刻、デザインなど造形芸術に関する学理と表現技法を研究するために「絵画・版画表現演習」、「彫塑・立体表現演習」、「デザイン・プロジェクト演習」、「地域デザイン特論」及び「伝統文化論」の各研究分野に則った授業科目を配置し、研究・教育を行っている。その履修イメージを【資料Ⅱ－８】に示す。

【資料Ⅱ－８】履修イメージ（文化創造専攻 造形芸術分野）



スポーツ科学分野では、スポーツ科学に関する学理と実践技法を研究するために「生涯スポーツ」、「スポーツ政策」、「スポーツ工学」及び「スポーツ生理学」の各研究分野に則った授業科目を配置し、研究・教育を行っている。その履修イメージを【資料Ⅱ－９】に示す。

【資料Ⅱ－９】履修イメージ（文化創造専攻 スポーツ科学分野）



<b>観点 学生や社会からの要請への対応</b>
--------------------------

(観点に係る状況)

○学生からの要請への対応

本研究科では、働きながら学ぼうとする学生のニーズに応えるために、入学試験制度に社会人特別選抜、履修方法に長期履修制度を導入している。平成 21 年度には 4 名の社会人が入学した。また、学生の教育職員免許状等（専修免許・資格）の取得希望に応えるために、【資料Ⅱ-10】に示すとおり、履修規則及び大学院規則に定めている。更には国際化に対応するため、外国人留学生特別選抜を導入し、平成 21 年度には 1 名の外国人留学生が入学している。

**【資料Ⅱ-10】**

IV 教育職員免許状等（専修免許状・資格）

2. 本研究科で取得できる専修免許状の種類は履修規則及び山形大学大学院規則・別表(30頁)のとおりである。
3. 中学校教諭及び高等学校教諭の一種免許状を有する者は、本研究科で開設する授業科目(履修規則・別表1[開設授業科目及び単位数]参照)から、各自が取得しようとする専修免許状に照らして必要な単位数を修得することにより、それぞれに相応する次の専修免許状(免許教科の種類)を取得することができる。
  - ① 中学校教諭専修免許状(音楽、美術、保健体育)
  - ② 高等学校教諭専修免許状(音楽、美術、工芸、保健体育)
4. 臨床心理学専攻は、(財)日本臨床心理士資格認定協会により、臨床心理士を養成するための第1種指定大学院として指定を受けている。臨床心理学専攻に所属し2年次の臨床心理実習(90~180時間)を含む指定の授業科目を履修した学生は、修士課程修了後、臨床心理士の受験資格を得ることができる。

(大学院履修の手引き) 抜粋

また、職業を有している等の事情のため標準修業年限で修了することが困難である者を対象に、【資料Ⅱ-11】に示すとおり「長期履修学生」の制度を設けている。

**【資料Ⅱ-11】**

第3章 標準修業年限及び収容定員

(標準修業年限)

第7条 修士課程及び専門職学位課程の標準修業年限は、2年とする。

(長期履修学生)

第7条の2 学生が、職業を有している等の事情により前条に規定する標準修業年限を超えて一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修し課程を修了することを希望する場合は、当該委員会の議を経て学長が許可する。

(山形大学大学院規則)

○社会からの要請への対応

本研究科及び地域教育文化学部には設置されている心理教育相談室には、地域における様々な相談が寄せられ、臨床心理学専攻の学生によるアウトリーチ(ボランティア)の活動【資料Ⅱ-12・Ⅱ-13】を積極的にを行い、それらの要請に応じている。

## 【資料Ⅱ-12】心理教育相談室におけるアウトリーチ活動（ボランティア等）

活動の種類別	対応した大学院生の人数（名）
治療的家庭教師	4
児童養護施設学習ボランティア	1
児童相談所メンタルフレンド	2
少年鑑別所学習支援カウンセラー	1
就業支援カウンセラー	1
発達障害の子ども達の合宿プログラムの企画、運営、実施	7
不登校・ひきこもりセミナーの運営補助	7

## 【資料Ⅱ-13】発達障害児のトレーニングボランティア募集のチラシ

## ボランティアさんを探しています

【山形 AD/HD 児・者親の会「トットチャン」】は、AD/HD・アスペルガー・高機能自閉症など、発達障がいを持った子とその親のサークルです。

2001年に活動を開始し、現在約70組の親子が参加しています。先生のご指導の下、毎月の定例会、親の勉強会、子ども達のための遊びの会などの活動をしています。

発達障がいを持つ子ども達にとって、コミュニケーションスキルの向上を図るためのSST(ソーシャルスキルトレーニング)は、欠かすことが出来ません。ところが、トレーニングを受けられる人数も施設も限られているのが現状です。子ども達のための遊びの会は、それを補うことが出来ればと思い、始めました。体育館での集団遊びや、屋外でのバーベキュー・ウォークラリーなど、毎回さまざまな活動を行っています。

この活動を継続するためには、子ども達と一緒に活動してくれるたくさんのサポートが必要です。「確実に自分を庇護してくれる親」の手を離れ、自分と他人との関係を築くトレーニングをするためです。発達障がい児の特性は、十人十色。そのことを理解し、サポートしてくれる若い力を求めています。将来、子ども達の教育に関わる職業を考えている方には、さまざまなタイプの子ども達に接する良い機会にもなると思います。

子ども達と関わってみたいと思われる方は、宮崎昭先生までご一報下さい。活気あふれるサポーターを、お待ちしております。

山形 AD/HD 児・者親の会「トットチャン」

また、造形芸術分野に係る社会からの要請として、造形等による地域の活性化の共同促進があり、その一例として、当該地域に出向き、地域の人々と緊密に連携したアートイベントを開催し、外国人留学生を含めた学生たちに主体的に企画させることによって、アートマネジメント能力の育成に大きな効果があったことが挙げられる。

【資料Ⅱ-14】

【資料Ⅱ-14】

この部分は著作権の関係で  
掲載できません。

次に、音楽芸術分野に係わる社会からの要請について例を挙げる。山形市には東北唯一のプロ交響楽団が存在し、活動を行っている。平成21年8月に社団法人山形交響楽協会と国立大学法人山形大学は相互協力の協定【資料Ⅱ-15】を締結している。具体的内容は【資料Ⅱ-16】のとおり。

【資料Ⅱ-15】

「社団法人山形交響楽協会と国立大学法人山形大学との相互協力に関する協定書」より  
抜粋

(目的)

第1条 本協定は、山形県に本拠地を置くプロ・オーケストラである社団法人山形交響楽協会と、学術の中心として知的資源が集積する国立大学法人山形大学が、様々な芸術活動上の協力を通じて、魅力ある地域づくりや文化振興に資することを目的とする。

【資料Ⅱ-16】

- ① 山形大学学生が、山形交響楽団コンサートに合唱団の主要メンバーとして出演協力をする。
- ② 山形大学学生が、山形交響楽団伴奏のオペラに合唱団の主要メンバーとして出演協力をする。
- ③ 山形大学学生が、アフィニス音楽祭にスタッフとして関わり、高い音楽文化の普及に貢献する。

## (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

本研究科は、臨床心理学専攻では臨床心理学に関する必修科目と5群からなる選択科目及び課題研究を配置し、また文化創造専攻では音楽芸術、造形芸術、スポーツ科学の3分野共通として生涯学習特論、文化コーディネート実習、総合連携科目、そして分野ごとには高度な専門性を探求できる授業科目を整備し、充実したカリキュラムとなっている。

学生や社会からの要請への対応という点では、学生に対しては、社会人入学制度や長期履修制度を設けてニーズに応じている。

また、社会からの要請について、臨床心理学専攻では地域における様々な教育相談に応えるために、授業と関連したアウトリーチ活動やボランティア活動を積極的に展開しており、また造形芸術分野においては地域との連携した地域活性化イベントや活動を行ってニーズに応じている。さらには、音楽芸術分野では、大学とプロ・オーケストラの協定書にあるとおり、質の高い技術の提供を求められており、その期待に十分応えている。

以上のことにより、期待される水準を上回ると判断される。

## 分析項目Ⅲ 教育方法

### (1) 観点ごとの分析

#### 観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点到に係る状況)

「地域教育文化研究科 履修の手引き」(平成21年度版) P.39 に示されているように、臨床心理学専攻及び文化創造専攻において、講義、演習、実習、実験など【資料Ⅲ-1】、授業の形態を適切に組み合わせて指導している。

#### 【資料Ⅲ-1】専攻・分野における講義・演習・実習の開講科目数

授業形態 専攻・分野	講義	演習	実習・実験	計
臨床心理学専攻	19	6	2	27
音楽芸術分野	7	16	2	25
造形芸術分野	10	11	1	22
スポーツ科学分野	16	5	1	22

臨床心理学専攻では、臨床心理士の基本業務に関わる授業科目を必修とし、また地域の中で様々な問題解決を図ることができる実務遂行能力と倫理性が求められるために、臨床心理学に関する特論と、組織的計画的な実習を必修としている。心理教育相談室における実習の現状は【資料Ⅲ-2～Ⅲ-3】のとおりである。

## 【資料Ⅲ－２】心理教育相談室における実習状況

延べ人数

実習の種別	人数(名)
陪席実習	7
プレイセラピー	2
言語面接	1
発達障害児に対する集団 SST プログラム	6
発達障害児の保護者に対するグループプログラムのファシリテーター	1
インテークカンファレンス	7
院生ケースカンファレンス	7
相談室の運営業務(電話受付・ケースマネージメント・カンファレンスのマネージメント)	7

## 【資料Ⅲ－３】臨床実習日誌（表紙）

上記の実習に加え、学生達が主体的に取り組むアウトリーチ活動として、P14の【資料Ⅱ－12】に示したように、治療的家庭教師をはじめ、児童養護施設における学習ボランティア、児童相談所メンタルフレンド、少年鑑別所学習支援カウンセラー、就業支援カウンセラー、発達障害の子ども達のSSTプログラムの企画、運営、実施、不登校・ひきこもりセミナーの運営補助等がある。

こうした活動は、講義・演習、実習に加え、学生達にとって意義のある活動となっている。

また文化創造専攻においても、講義、実習、演習などの授業形態を組み合わせ、指導を行っている。特に、各専攻の総合的共通理解を深めるため、1年次開講の分野共通必修科目「生涯学習特論」では、生涯学習の意義と役割について深く考察するとともに、各分野における具体的事例を通して、現状と課題を把握し、今後の生涯学習社会のあり方について学習者や行政の立場から総合的に展望している。修了研究に係る指導体制としては、1年次に特別研究Ⅰ、2年次に特別研究Ⅱを開講し、段階的に修了研究課題の探求を目指している。これについては各専攻・分野毎の履修モデルを掲げている。【P. 11-12：資料Ⅱ－6～Ⅱ－9参照】

さらに、文化創造専攻で来年度開講される「文化コーディネート実習」において、音楽芸術分野では、交響楽団、音楽団体、公共施設等における実習を、また造形芸術分野では、美術館等における実習を、スポーツ科学分野においては、各種競技団体、協会及び公共施設等における実習を通して各種事業の企画・運営の能力の向上を図り、各分野での地域における事業において文化的貢献のできる人材養成を目的とし、それに向けて次のような取り組みを準備段階として行っている。

音楽芸術分野で行っている地域連携の取り組みを次に紹介する。【資料Ⅲ－４】

## 【資料Ⅲ－４】音楽芸術分野におけるアウトリーチ活動

活 動 の 内 容	人数(名)
「みんなで歌おう童謡・愛唱歌」への演奏参加【山形新聞及びHP】（毎週日曜日掲載）	2
「子育て応援団 すこやか 2009」【山形新聞】（5月31日：山形市ビッグウイング）に出演	2
オペラ公演【蔵王3小・2中】（11月2日：蔵王3小・2中体育館）	4
オペラ公演【天童3中】（11月6日：天童市民文化会館）	4

このようなアウトリーチ形式の実習は、2つの専攻で授業と関連づけて、盛んに行われており、実習という授業形態が学習指導に効果的に結びついていると言える。

## 【資料Ⅲ－４－１ みんなで歌おう童謡・愛唱歌】 【資料Ⅲ－４－２ 子育て応援団 すこやか 2009】

この部分は著作権の関係で  
掲載できません。

この部分は著作権の関係で  
掲載できません。

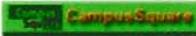
## 【資料Ⅲ－４－３ オペラ公演：蔵王3小・2中】 【資料Ⅲ－４－４ オペラ公演：天童3中】

この部分は著作権の関係で  
掲載できません。

この部分は著作権の関係で  
掲載できません。

シラバスについては、Web ページにおいて誰でも常時確認することができる【資料Ⅲ－５：生涯学習特論シラバス】。履修者に対して事前にすべての授業の目的やねらい、授業計画を明示し、ゆとりを持って授業に臨むことができる教育環境整備をしている。

## 【資料Ⅲ－５：生涯学習特論シラバス】



YUサポートページ  
 履修管理  
 成績管理  
 成績登録  
 シラバス  
 シラバス参照  
 シラバス登録

---

 更新
  設定
  終了

## 生涯学習特論

## Teaching of Lifelong Learning

担当教員：鈴木 渉(SUZUKI Wataru), 鈴木 漠(SUZUKI Hiroshi), 佐多不二男(SATA Huzio), 降旗 孝(HURIHATA Takasi)

担当教員の所属：地域教育文化学部文化創造学科音楽芸術コース

開講学年：1年 開講学期：前期 単位数：2単位 開講形態：講義

## 【授業概要】

## ・テーマ

高齢化社会が加速度的に進展することが予測される中において、生涯学習社会の充実した構築が益々重要となっている。こうしたことを背景に、生涯学習の現代的な意義と役割について深く考察するとともに、音楽文化・造形文化・スポーツ文化の各分野における具体的な事例を通して、生涯学習社会の教育・学習システム等の現状と課題を把握し、今後の生涯学習社会の在り方について学習者や行政の視点から総合的に展望する。（共同担当、全15回／1回及び14・15回目は担当教員全員、2～13回は分担担当）

## ・ねらい

生涯学習をサポートし、推進する資質を備えるために、音楽文化・造形文化・スポーツ文化の生涯学習の意義と課題を学習する。

## ・目標

高齢化社会における生涯学習の意義と役割、その生涯学習の理念について理解するとともに、人間文化全体を貫く倫理観の上に豊かな人生の創造に向けて、先導的な役割を果たすことができるよう生涯学習の推進の在り方について実践的に理解する。

## 【授業計画】

## ・授業の方法

## ・日程

第1回 高齢化社会及び生涯学習の意義・役割に関する学習経験や実践等を踏まえて、学習課題を明確にする。（オリエンテーション含む）

（担当 佐多不二男、鈴木 漠、鈴木 渉、降旗 孝）

第2回 我が国及び諸外国の高齢化社会の現状と課題について資料を基に理解する。社会における人間文化全体を貫く倫理観や価値観について考察し明らかにする。（担当 佐多不二男）

第3回 生涯学習の意義や理念としての生涯教育を理解した上で、我が国全体の生涯学習施策の現状と課題について諸答申や資料を基に明らかにする。（担当 佐多不二男）

第4回 地方自治体における生涯学習推進の現状について、資料及び具体例を通して把握するとともに、地域特性に応じた課題について明らかにする。（担当 佐多不二男）

第5回 生涯学習における音楽文化の現状について、ジャンルの淘汰と多様化、また融合をくり返す今日の音楽文化の状況を、文化活動の推進と生涯学習の支援の観点から把握する。（担当 鈴木 渉）

<b>観点 主体的な学習を促す取組</b>
-----------------------

(観点に係る状況)

○少人数指導による成果

少人数の授業が多く、各教員が丁寧な指導を行っている。専門への関心を喚起するような積極的アプローチにより、学生による主体的学習に導いている。

具体的には、学会及び研究会、コンクールや大会への参加の機会を数多く設けることで、研究や実践への意欲を喚起している。造形芸術分野の取り組みでは、学生が全国規模の公募展覧会（モダンアート展・版画展）に入選し【資料Ⅲ－6～Ⅲ－7】（山形新聞 2009. 4.1 並びに 4.19 掲載）、東京都美術館で作品発表を行った。次に、音楽芸術分野では、学外でのコンクール、学会活動、外部団体音楽会での出演など、学生の主体的な活動を奨励している【資料Ⅲ－8】。

【資料Ⅲ－6：モダンアート展】



第59回 モダンアート展  
2009年4月23日(木) — 5月7日(木)  
東京都美術館

【資料Ⅲ－7：版画展】



上野:東京都美術館 TOKYO Metropolitan Art Museum Ueno  
2009年4月6日(月)～4月21日(火)

【資料Ⅲ－8】

○コンクール等参加状況

東京国際声楽コンクール

鈴木 集 (院1) バリトン 東北予選通過 全国大会出場

宮下 通 (院1) テノール 東北予選通過 全国大会出場

佐藤麻里絵 (院1) アルト 東北予選出場

○学会参加状況

佐藤麻里絵 日本音楽芸術マネジメント学会会員

○オペラ公演出演

鈴木 集 (院1) バリトン 山形声楽研究会会員 オペラ小鶴「神名吉左衛門」役

宮下 通 (院1) テノール 山形声楽研究会会員 オペラ小鶴「鹿間新八郎」役

○TA制度を活用

将来、教員や指導的立場について活躍するためのトレーニングの場として、TA制度を積極的に活用している。学部授業の指導助言補助などの業務に携わることで、自らの研究や将来の教育・研究能力の涵養を目指している。平成21年度前期・後期は、学部が開講している19の授業科目に10人の大学院生がTAとして登録され【資料Ⅲ－9】、授業の補助等の業務に携わっている。

## 【資料Ⅲ－9：TAの担当授業科目】

T A	授業科目	T A	授業科目
1	心理学実験	11	合唱 G
2	心理学研究法	12	造形の基礎
3	心理査定法	13	工芸 I
4	集団音楽表現	14	教育実践研究（体育）
5	集団音楽表現	15	教材開発研究（体育）
6	集団音楽表現	16	サッカー
7	声楽 I B（前期）	17	テニス
8	声楽 I B（後期）	18	スノースポーツ
9	ピアノ II B（前期）	19	情報機器の操作
10	ピアノ II B（後期）		

## （2）分析項目の水準及びその判断理由

（水準）期待される水準を上回る。

（判断理由）

授業形態の組み合わせと学習指導法の工夫については、各専攻・各分野の教育目的に添えるよう、講義、演習、実習、実験など学生の学習内容に応じた授業形態をバランス良く整えている。特に専門知識や技術・技能を育成するため、実習・演習を重視している。臨床心理学専攻では臨床心理士の基本業務に関わる授業科目を必修とし、また地域の中で様々な問題解決を図ることができる実務遂行能力と倫理性が求められるために、臨床心理学に関する特論と、組織的計画的な実習を必修として、ボランティア等アウトリーチ活動にも積極的に取り組んでいる。

文化創造専攻では、分野共通必修科目「生涯学習特論」や他専攻・他分野で開講される「総合連携科目」の履修を義務付けるほか、音楽芸術分野及び造形芸術分野においては地域連携の取り組みを授業に関連付けている工夫を行っている。

シラバスについては、すべての授業科目で作成されており、かつ、これらのシラバスをWeb上で常時閲覧できるシステムを構築し、活用している。

また、主体的な学習を促す取り組みとしての、少人数指導、学生の主体性を活かしたアウトリーチ活動への取り組み、学会や展覧会への参加の奨励、TA制度の活用などの成果は、【資料Ⅲ－6～Ⅲ－8】に示されるとおりで、これらの取り組みは、次年度（2年次）における、「文化コーディネーター実習」につながっていくものであり、その前段階として順調に進んでいる。

以上のことにより、期待される水準を上回ると判断される。

## 分析項目Ⅳ 学業の成果

## (1) 観点ごとの分析

## 観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

## ① 学生の履修及び単位の取得状況

【資料Ⅳ－１】の学生の履修及び単位の取得状況に示すとおり、各分野１年次に定められた単位をほぼ全員取得している。このデータから下記の内容が裏付けられる。

臨床心理学専攻では、「臨床心理学特論」などの必修６科目を履修することにより、臨床心理学の基本業務に関わる能力を育成している。すなわち、精神科病院等の臨床心理業務や中学校のスクールカウンセリング、児童相談所の心理判定、児童養護施設における被虐待児の心理療法など、こころのケアに関する高度な能力を学生が身に付けているといえる。

文化創造専攻では、分野毎に「音楽活動支援論」（音楽芸術分野）、「絵画・版画表現演習」（造形芸術分野）、「現代スポーツ論」（スポーツ科学分野）などの必修科目を履修することにより、専門的実技能力・知識などを養成している。加えて、「生涯学習特論」を通して、文化創造のベースとなる生涯教育の基礎的知識と能力を、「総合連携科目」を通して、分野を超えた幅広い視野を育成して、大学院生として相応しい学力や資質・能力を身に付けているといえる。

## 【資料Ⅳ－１】学生の履修及び単位の取得状況

専攻	分野	人数	総取得単位数 平均	履修登録数 平均	単位認定数 平均	単位認定率 平均
臨床心理学専攻		7	35.14	17.57	17.57	100 %
文化創造専攻	音楽芸術分野	4	35.00	17.25	16.25	94.20%
	造形芸術分野	3	30.00	14.00	14.00	100 %
	スポーツ科学分野	4	31.50	14.75	14.75	100 %

## ② 平成 21 年度授業改善アンケート

平成 21 年度前期・後期に実施した授業改善アンケート【資料Ⅳ－２】からは、専門の知識・技能を学び身に付いた点、実践によるスキルアップを実感できた点、分野を越えた授業で得られた知識など、これまでの学生が身に付けた学力や資質・能力を学生が自ら具体的に述べていることがわかる。

## 【資料Ⅳ－２】平成 21 年度授業改善アンケート結果

設問④「この授業で良かったと思う点」（自由記述を項目別にまとめたもの）

自由記述内容	前期(延べ110名)	後期(延べ90名)
専門の知識・技能を学べた等	74名	52名
実践によるスキルアップがあったと思う等	19名	36名
他分野の知識を得ることができた等	12名	2名
その他	5名	0名

<b>観点 学業の成果に関する学生の評価</b>
--------------------------

(観点に係る状況)

平成 21 年度前期・後期に実施した授業改善アンケートに基づき、学業の成果に関する評価を以下に述べる。【資料Ⅳ－3】からは9割強の学生が授業を総合的に判断した結果、好印象をもっており、学業に関する学生の評価については学生自身具体的に成果があったと実感していることがわかる。

**【資料Ⅳ－3】平成 21 年度授業改善アンケート結果**

設問⑤「この授業を総合的に判断すると良い授業だと思うか」(番号に○を付ける)

評価段階	前期	後期
5 はい	88名 (80%)	72名 (83.7%)
4 まあそうである	19名 (17%)	10名 (11.6%)
3 どちらとも言えない	1名 (1%)	4名 (4.7%)
2 あまりそうとは言えない	1名 (1%)	0名 (0%)
1 いいえ	0名 (0%)	0名 (0%)
回答なし	1名 (1%)	0名 (0%)

また、本研究科では平成 22 年 1 月に「大学院生の質の向上に関する自己評価アンケート」【資料Ⅳ－4】を実施した。このアンケートの設問 1 では、「専門知識に関する能力」、「専門や実技に関する能力」、「研究に関する能力」のいずれの項目においても「4」以上の平均値【資料Ⅳ－5】を示しており、入学以降現在までの期間で質の向上を自ら実感していることがわかる。

**【資料Ⅳ－4】大学院生の質の向上に関する自己評価アンケート設問**

番号	設問内容
設問 1.	以下の点に関して、大学院に入学して以降現在までの変化について、最もよく当てはまるところに○をつけてください。→「専門知識に関する能力」「実践や実技に関する能力」「研究に関する能力」の3点についての5段階評価(能力の向上した上限の最大値を5として、1までの5段階)。
設問 2.	あなたが大学院に入学して以降、講義、演習、その他を通して、身につけた、あるいは伸びたと思われる能力・技術、資質、事柄等に関して、できるだけ具体的に書いてください(いくつでもかまいません)。【自由記述】

**【資料Ⅳ－5】大学院生の質の向上に関する自己評価アンケート 設問 1 の平均値**

設問項目	本研究科学生の平均値 (18名)
専門知識に関する能力	4.61
実践や実技に関する能力	4.33
研究に関する能力	4.33

次に自由記述に関して、授業改善アンケート【資料Ⅳ－2】及び「大学院生の質の向上に関する自己評価アンケート」【資料Ⅳ－6】を分析した結果、【資料Ⅳ－2】では、特に後期に至るほど実践能力が身に付いたと答え、また【資料Ⅳ－6】では専門知識及び専門家としての実践力に関して向上したとする回答が多数あった。

【資料Ⅳ－6】大学院生の質の向上に関する自己評価アンケート（自由記述を項目ごとにまとめたもの）

「主な自由記述」を記載内容別に集約した項目	のべ人数
専門知識に関して向上したとする内容のもの	15
専門家としての実践力に関して向上したとする内容のもの	15
プレゼンテーション能力、交渉力に関して向上したとする内容のもの	5
マネジメント能力、企画・運営能力に関して向上したとする内容のもの	5
研究能力（パソコンスキル、データ分析スキル）に関して向上したとする内容のもの	3

## （2）分析項目の水準及びその判断理由

（水準）期待される水準を上回る。

（判断理由）

前述の様に、【資料Ⅳ－3】からは9割強の学生が授業を総合的に判断した結果、好印象をもっており、学業に関する学生の評価については、学生自身具体的に成果があったと実感していること、また【資料Ⅳ－4】のアンケート分析からは、学生が「専門知識に関する能力」、「専門や実技に関する能力」、「研究に関する能力」のいずれの項目においても、入学以来現在までの期間で質の向上を自ら実感していること、さらに自由記述に関しては、授業アンケート結果、資料【資料Ⅳ－2】に示したものとほぼ同様の傾向であり、特に後期に至るほど実践能力が身についたと自己評価していることなどがわかる。このことより、期待される水準を上回ると判断される。

## 分析項目Ⅴ 進路・就職の状況

### （1）観点ごとの分析

#### 観点 卒業（修了）後の進路の状況

（観点到に係る状況）

（該当なし。本研究科は、平成21年度開設のため、まだ修了生が出ていない。）

#### 観点 関係者からの評価

（観点到に係る状況）

（該当なし。本研究科は、平成21年度開設のため、まだ修了生が出ていない。）

### （2）分析項目の水準及びその判断理由

（該当なし。本研究科は、平成21年度開設のため、まだ修了生が出ていない。）

### Ⅲ 質の向上度の判断

#### ① 事例1「専門的な知識・技能を系統的に学ぶ教育課程」(分析項目Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取り組み)

臨床心理学専攻では、臨床心理学に関する必修科目と5群からなる選択科目及び課題研究を配置し【資料Ⅱ-4】、また文化創造専攻では音楽芸術、造形芸術、スポーツ科学の3分野共通として生涯学習特論、文化コーディネート実習、総合連携科目【資料Ⅱ-3・Ⅱ-5】を開講し、かつ、分野ごとに高度な専門性を探求する授業科目を配して、充実したカリキュラムとなっている。

各専攻、分野の履修イメージは【資料Ⅱ-6～Ⅱ-9】に示されるように、系統的に学べるよう配置されており、教育内容に関して質の向上が見られると判断する。

【資料Ⅱ-4】臨床心理学専攻の教育課程表：P. 9

【資料Ⅱ-5】文化創造専攻の教育課程表：P. 10

【資料Ⅱ-3】総合連携科目：P. 8

【資料Ⅱ-6】履修イメージ(臨床心理学専攻)：P. 11

【資料Ⅱ-7】履修イメージ(文化創造専攻 音楽芸術分野)：P. 11

【資料Ⅱ-8】履修イメージ(文化創造専攻 造形芸術分野)：P. 12

【資料Ⅱ-9】履修イメージ(文化創造専攻 スポーツ科学分野)：P. 12

#### ② 事例2「地域と連携したアウトリーチ活動」(分析項目Ⅱ、Ⅲ)

(質の向上があったと判断する取り組み)

本研究科及び地域教育文化学部設置されている心理教育相談室には、地域から様々な相談が寄せられ、臨床心理学専攻の学生によるアウトリーチ(ボランティア)の活動【資料Ⅱ-12】を積極的に行い、適切に要請に応じている。造形芸術分野に係る社会からの要請として、造形等による地域の活性化の共同促進があり、その一例として、当該地域に出向き、地域の人々と緊密に連携したアートイベントを開催し、外国人留学生を含めた学生たちに主体的に企画させることによって、アートマネジメント能力の育成に大きな効果があったことが挙げられる【資料Ⅱ-14】。また音楽芸術分野におけるアウトリーチ活動でも【資料Ⅲ-4】、学生による企画・運営を重視しており地域の芸術文化のリーダーの育成として、質の向上が見られると判断する。

【資料Ⅱ-12】心理教育相談室におけるアウトリーチ活動(ボランティア等)：P. 14

【資料Ⅱ-14】「アートで飾る新庄駅前通り」山形新聞2009. 9. 22掲載：P. 15

「活性化へ連携イベント」河北新報2009. 9. 18掲載

【資料Ⅲ-4】音楽芸術分野におけるアウトリーチ活動：P. 18

#### ③ 事例3「学生の研究実践活動」(分析項目Ⅲ)

(質の向上があったと判断する取り組み)

本研究科では、学生の実践力のレベルアップを図るために学外での様々な研究実践活動を推進している。造形芸術分野の取り組みでは、学生が全国規模の公募展覧会に入選し【資料Ⅲ-6～Ⅲ-7】東京都美術館で作品発表を行った。次に、音楽芸術分野では、学外でのコンクール、学会活動、外部団体音楽会での出演など、学生の主体的な活動を奨励している【資料Ⅲ-8】。これらの研究実践活動を行うことにより、質の向上が見られると判断する。

【資料Ⅲ-6：モダンアート展】：P. 20

【資料Ⅲ-7：版画展】：P. 20

【資料Ⅲ-8】：P. 20

## 13. 教育実践研究科

教育実践研究科の教育目的と特徴	・・・	13-2
分析項目ごとの水準の判断	・・・	13-3
分析項目Ⅰ 教育の実施体制	・・・	13-3
分析項目Ⅱ 教育内容	・・・	13-6
分析項目Ⅲ 教育方法	・・・	13-18
分析項目Ⅳ 学業の成果	・・・	13-31
分析項目Ⅴ 進路・就職の状況	・・・	13-40
質の向上度の判断	・・・	13-41

## 教育実践研究科の教育目的と特徴

本研究科は、大学院設置基準に従い、「教職に係る高度な専門性の育成」のため、大学と学校現場を往還して教育を実施することを教育研究上の理念として、平成 21 年 4 月に設置した。

### ○教育の目的及び目標

本研究科の教育目的は次のとおりである。

- 1 グローバル化・情報化・少子高齢化等による地域社会の構造変革の中で、複雑化・多様化する学校教育を円滑に行う指導的・中核的役割を果たし得る力量ある人材（ミドルスクールリーダー）を育成する。
- 2 地域教育文化学部を中心とする各学部と連携して、教科等の指導力を基盤とする基礎・応用を往還させた教育を、研究者教員と実務家教員が一体となって行い、確かな授業力及び豊かな人間力を備えた人材を養成する。
- 3 学校教育の場における教育実践を強く志向する学部卒業生等については、学部段階で修得した基礎的・基本的な資質能力をもとに、密度の濃い教育実践等のカリキュラムにより、学習指導や生徒指導及び学級経営等に関して即戦力となりうる実践的能力を具備する人材を養成する。

上記の目的を達成するために、育成する人材像（養成する教員像）を教育目標として次のとおり掲げている。

- 1 多様な人々が互いに学び、育ち合う関係を構築できる教員
- 2 学校と地域を開かれた関係で結び、確かなパートナーシップを築ける教員
- 3 確かな「授業力」を備え、地域の子どもの学力向上を支えられる教員
- 4 豊かな「人間力」と社会性を備え、地域における学校力向上を推進できる教員

### ○特徴

本研究科は、学生のキャリア発達を考慮し、「学習開発コース」と「学校力開発コース」の2つのコースを設置している。ここでは、定められた教科指導力や学校力開発に係る資質能力の養成に加え、本学附属学校園と地域の連携協力校における実習を必修とし、「都市圏」や「異文化圏」での応用的な実習もできるようになっている。また、現職教員の受け入れについては、特段の配慮を図っている。

#### [想定する関係者とその期待]

##### ○地域や学校関係者から寄せられている研究科への期待

本研究科は、その設置の目的より、地域や学校及び教育関係機関などから、今日の様々な教育課題に対して、深い学識、高い実践的指導力、同僚性や学校経営に関わる資質能力、解決に向けた実践的な手法を身につけた高度な専門職業人を養成することが求められている。

##### 地域や学校関係者から寄せられている大学院生への期待

大学院生は、学校における様々な教育課題に自ら立ち向かう強い意思を持ち、課題に対する適切な指導の在り方について実証的に研究し、高度な実践力を身につけることが求められ、学校経営・児童生徒・各教科等の指導に関することなど、学校教育に関わる様々な分野の専門的・実践的な能力を高めようと意欲的に取り組むことが期待される。

## 分析項目ごとの水準の判断

## 分析項目Ⅰ 教育の実施体制

## (1) 観点ごとの分析

## 観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

## ○教育研究組織

本研究科は、「教職実践専攻」の1専攻で、「学習開発コース」と「学校力開発コース」の2つのコースから構成されている。各コースの概要及び特徴は次のとおりである。

## 学習開発コース

本コースは、「授業力」と授業研究をリードできる資質能力の育成に重点を置く。対象は、学部段階で教員としての基本的な資質能力を修得した学部卒業生等と、現場での一定の教育経験を有する小・中・高等学校の現職教員である。資質能力と経験差を生かした学び合いにより相互に実践的指導力を高め合うことを特徴とする。

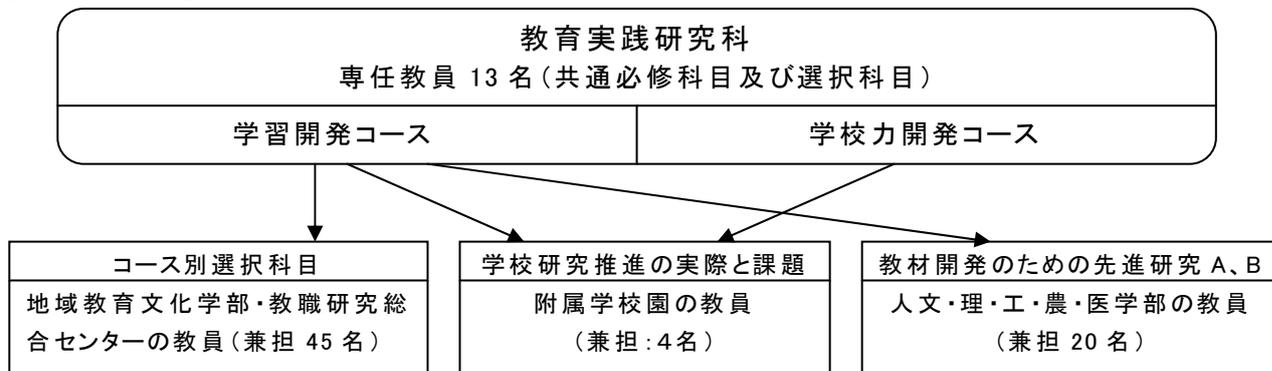
## 学校力開発コース

教育課程の編成や学校研究において学校の教育力を活性化できる豊かな「人間力」を備えた教員を養成する。本コースは、同僚や地域社会と連携して学校改革を推進できる「ミドル・スクールリーダー」としての資質能力の育成に重点を置き、現職教員を対象とする。これからの学校づくりについて共通した課題意識を強く有する教員同士が相互に研鑽し合うことを特徴とする。

## ○教員組織の構成

専任教員は、研究者教員7名と実務家教員6名(みなし専任1名)の計13名で構成して、地域教育文化学部教員や他学部等の教員計69名の兼任教員があり、先端科学理論や実践学の講義を通して、教師スキルを向上させる体制を構築している。【資料1-1-1】

## 【資料1-1-1】授業実施のための教員組織



## ○学生定員と現員

定員及び平成21年度の学生数、さらに、現職教員とストレートマスター(学部卒院生)の内訳は、次の【資料1-1-2】のとおりである。

## 【資料1-1-2】平成21年度 大学院教育実践研究科 学生定員及び現員

コース	現職の別	定員	現員	合計
学習開発コース	ストレートマスター	10	11(8)	14(9)
	現職教員	3	3(1)	
学校力開発コース	ストレートマスター			7(2)
	現職教員	7	7(2)	

\* ( )内の数は女子の数である。また、ストレートマスターは学部卒院生のことである。

<b>観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制</b>
----------------------------------

(観点に係る状況)

○FDの取り組み

本研究科への理解と認識を深めるため、学外研修会への参加や学内教員研修会を実施した。さらに、各学期の初めには、学部等の授業担当者を対象とする授業説明会を実施している。また、山形県教育委員会を対象に授業を公開し、大学院検討専門部会等を通じて意見交換を行い、カリキュラムや授業改善に反映している。(【資料 1-2-1】)

**【資料 1-2-1】FDの取り組みとその実施状況**

①教員研修会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成 21 年 3 月 26 日(木):教員研修会「我が国の教育政策の動向と今後の課題」 講師:山際 隆 玉川大学大学院特任教授 (研究者教員8名)</li> <li>・平成 21 年 3 月 27 日(金):教職大学院の認証評価に関わる研修会 講師:田中武雄 宮城教育大学教授 (研究者教員9名)</li> <li>・平成 21 年 8 月 3(月)~5 日(水):第9回山形大学 FD セミナー (実務家教員3名参加)</li> <li>・平成 22 年 2 月 9 日(火):「今後の教員養成の在り方」に関する教育講演会 講師:牛渡 淳 仙台白百合大学人間学部長 岩田 康之 東京学芸大学教員養成カリキュラムセンター准教授 (専任教員 11 名)</li> <li>・平成 22 年 3 月 14 日(日):理科・環境教育シンポジウム 講師:清原洋一 文部科学省教育課程課教科調査官 (専任教員4名)</li> </ul>
②公開授業等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成 21 年 6 月 9 日(火)~12 日(金):山形県教育委員会を対象とする授業公開</li> <li>・平成 21 年 12 月 4 日(金):山形県教育委員会の教職専門実習Ⅱの参観</li> </ul>
③学外研修会等への参加	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成 21 年 5 月 29 日(金):第2回教職大学院総会</li> <li>・平成 21 年 7 月 25 日(土):第1回教職大学院「課題研究」全国協議会</li> <li>・平成 21 年 10 月 17 日(土):平成 21 年度日本教育大学協会研究集会 第2分科会(教職大学院の今後と課題)で発表</li> <li>・平成 21 年 12 月 13 日(日):日本教育大学協会教職大学院連絡会</li> <li>・平成 21 年 12 月 19 日(土):教職大学院「教育実習」全国フォーラム</li> <li>・平成 22 年 3 月 1 日(月):教職大学院シンポジウム(奈良教育大学)</li> <li>・平成 22 年 3 月 8 日(月):第2回教職大学院「課題研究」全国協議会</li> </ul>
④授業関連の学習会及び説明会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成 21 年 4 月 21 日(火):前期・授業説明会</li> <li>・平成 21 年 6 月 13 日(土):「応用実習(異文化圏実習)」事前学習会 講師:池田俊一(オーストラリア国立大学)、J.F. Morris(宮城学院大学)</li> <li>・平成 21 年 10 月 1 日(木):後期・授業説明会</li> </ul>
⑤山形県教育委員会との意見交換	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成 21 年 7 月 28 日(火):大学院等検討専門部会</li> <li>・平成 21 年 9 月 28 日(月):大学院等検討専門部会</li> <li>・平成 22 年 2 月 5 日(月):大学院等検討専門部会</li> </ul>

○教育内容及び方法の改善に向けた取り組み

本研究科では、教育内容及び方法に関して、学生指導担当委員を中心に取り組んでいる。全授業について、学生を対象とする「授業評価アンケート」及び教員を対象に「授業報告書」による授業評価を実施している(【資料 1-2-2】)。「授業評価アンケート」はその結果をまとめ、調査結果を各指導教員にフィードバックし、以後の授業の改善に活用している。また、この報告書では、授業の到達目標に対する達成度の評価(自己評価)を行っている。(授業評価アンケート:【資料 4-2-1~4-2-3】を参照、授業報告書:【資料 3-1-6】及び【資料 3-1-7】を参照)

## 【資料 1-2-2】平成 21 年度 授業評価アンケート実施及び授業報告書提出状況(前期)

種 別(対象)	学期	実施授業数	回収数	回収率(%)	実施または提出期間
授業評価アンケート (学生)	前期	22	22	100%	平成 21 年 8 月 1 日～6 日
	後期	21	21	100%	平成 22 年 3 月 1 日～17 日
授業報告書 (教員)	前期	21	21	100%	平成 21 年 9 月 1 日～24 日
	後期	19	19	100%	平成 22 年 3 月 8 日～31 日

(注) 授業報告書の提出数には、実習は含まれていない。

## (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

本研究科は、大学院設置基準に基づく必要な教員数を確保している。また、教員研修会や学外研修会への参加を通して、各教員が専門職大学院(教職大学院)の意義と役割に対する理解を深め、カリキュラム改善を行う能力の向上を図っている。

○学部等の授業担当者には、授業説明会を実施し、連携を進める体制をとっている。

○本研究科の教育実習について、日本教育大学協会の研究集会(神戸市)で発表し、その教育効果の検証と改善を図っている。

山形県教育委員会への公開授業や「授業報告書」及び「授業評価アンケート」により、各々の要望に応じて教育内容や教育方法の改善を図る体制を整えている。

## 分析項目Ⅱ 教育内容

## (1) 観点ごとの分析

## 観点 教育課程の編成

(観点に係る状況)

## ○カリキュラムの特徴と履修基準

本研究科のカリキュラムは、中教審答申の教職大学院の制度設計を基盤に、「共通科目」「学校における実習科目(教職専門実習)」「コース別選択科目」の3つで構成している。「理論と実践の融合」を図るのに適切な科目構成・配置となっている。学生は、2年間で以下の【資料 2-1-1】に従って、45 単位以上を修得することとなっている。

## 【資料 2-1-1】授業科目区分と履修基準単位

科目区分		適用	単位数
共通科目	教育課程の編成と実施	全コース共通必修	20 単位
	教科等の実践的指導方法		
	教育相談・生徒指導		
	学級経営・学校経営		
	学校教育と教員の在り方		
学校における実習科目	教職専門実習(I～IV)	共通必修	10 単位
コース別選択科目	学習開発コース/学校力開発コース	所属コースから 10 単位、他から2単位以上を選択	12 単位
	応用実習領域		
	総括評価領域	共通必修	3 単位
合計(修了要件単位数)			45 単位

## ○到達目標と授業科目

本研究科では、「養成する教員像(教育目標)」として4項目を示し、それを具体化して、「求められる資質能力」、さらにそのための「到達目標」を『履修の手引き』に明記し、学生が常に目標に対して意識して学習することができるようにしている。

(【資料 3-1-4】参照)

## ○特色ある授業科目の設定

「教職大学院に関するニーズ調査」(平成 19 年 3 月、山形県内小中学校長 456 名、回収率 66%)を実施し、教育問題について重要と考えるのは、「不登校」、「発達障害」、「いじめ」といった問題であるとの結果を得た。この結果に対応するために、共通科目の「生徒指導、教育相談に関する領域」において、「子どもの不適応への理解と支援」、「学校カウンセリングの実践と課題」を開講した。加えて、学習開発コースに「発達障害児の個別支援の実践と課題」と「発達障害児のコミュニケーション支援」の2科目と、学校力開発コースで「子ども理解の事例研究」、「人間関係形成の実践と課題」の2科目の併せて4科目を選択できるようにした。

また、教職大学院に教員を派遣する理由として、上位の回答に「教科の専門性を高めたいから」、「教科の指導法について学ばせたいから」ということが挙げられたことから、学習開発コースにすべての教科を網羅する「教科内容研究」や「教材開発プロジェクト実習」などを開設した。

開設授業科目と単位数を次の【資料 2-1-2】((a), (b), (c))に示した。また、授業の概要は、【資料 2-1-3】に示すとおりである。

## 【資料 2-1-2】開設授業科目及び単位数：(a)『履修の手引き』p.35

別表1 【開設授業科目及び単位数】

科目区分	授業科目	開講 単位	必修 の別		開講週時間数		備 考
			必 選	選	1年次 前 後	2年次 前 後	
共通科目	教育課程の 編成と実施	特色あるカリキュラムの開発	2	2	2		
		カリキュラムの評価と今日的課題	2	2		2	
	教科等の実 践的指導方 法	授業実践の記録・分析と校内研修	2	2	2		
		教材開発と児童生徒理解（言語系）	2	2	2		
		教材開発と児童生徒理解（数理系）	2	2	2		
	教育相談・ 生徒指導	子どもの不適応への理解と支援	2	2	2		
		学校カウンセリングの実践と課題	2	2		2	
	学級経営・ 学校経営	学級経営とカリキュラムの開発	2	2	2		
		組織管理の実践と学校	2	2		2	
	学校教育と 教員の在り 方	社会と教員の在り方	2	2	2		
		学校の安全と防災教育	2	2		2	
	学校実習科目	教職実践実 習	教職専門実習Ⅰ（附属学校）	3	3	3	
教職専門実習Ⅱ（連携協力校）			4	4		4	
教職専門実習Ⅲ（連携協力校）			2	2		2	
教職専門実習Ⅳ（附属学校）			1	1			2
コース別選択科目	学習開発 コース	発達障害児の個別支援の実際と課題	2	2	2		
		発達障害児のコミュニケーション支援	2	2		2	
		認知学習過程と評価	2	2	2		
		道徳教育の実践と課題	2	2	2		
		数理系教科活用力とリテラシー	2	2	2		
		言語系教科活用力とリテラシー	2	2	2		
		表現系教科活用力とリテラシー	2	2	2		
		社会・生活系教科活用力とリテラシー	2	2	2		
		数理系教材開発プロジェクト実習	2	2		2	
		言語系教材開発プロジェクト実習	2	2		2	
		表現系教材開発プロジェクト実習	2	2		2	
		社会・生活系教材開発プロジェクト実習	2	2		2	
		脳科学と子ども支援	2	2	2		

## 【資料 2-1-2】開設授業科目及び単位数：(b)『履修の手引き』p.36

科目区分	授業科目	開講 単位	必 選 の 別	開講週時間数				備 考		
				1 年 次 前	1 年 次 後	2 年 次 前	2 年 次 後			
コース別選択科目	学習開発 コース	教材開発のための教科内容研究								
		数理系	教材開発のための教科内容研究（代数学領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（幾何学領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（物理学領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（化学領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（生物学領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（地学領域）	2		2	2			
		言語系	教材開発のための教科内容研究（国語学領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（国文学領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（漢文学領域）	2		2	2			
		言語系	教材開発のための教科内容研究（日本語教育学領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（英文学領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（英語学領域）	2		2	2			
		社会・生活系	教材開発のための教科内容研究（歴史学領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（哲学・倫理学領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（機械工学領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（木材加工領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（金属加工領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（食生活領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（衣・住生活領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（芸術学領域）	2		2	2			
		表現系	教材開発のための教科内容研究（作曲・指揮領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（絵画領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（デザイン・工芸領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（美術史・美術理論領域）	2		2	2			
			教材開発のための教科内容研究（体育学領域）	2		2	2			
			教材開発のための先進研究A（科学・技術）	2		2	2			
			教材開発のための先進研究B（文化・社会）	2		2	2			

## 【資料 2-1-2】開設授業科目及び単位数：(c)『履修の手引き』p.37

科目区分	授業科目	開講 単位	必選 の別 必 選	開講週時間数		備 考	
				1年次 前 後	2年次 前 後		
コース別選択科目	学校力開発 コース	子ども理解の事例研究	2	2	2		
		人間関係形成の実践と課題	2	2	2		
		学校研究推進の実際と課題	2	2	2		
		学校改善プラン開発実習	2	2		2	
		小規模複式学級の実践と課題	2	2	2		
		学社融合の実践と課題	2	2	2		
		学校力とファシリテーション	2	2	2		
		教員のキャリア形成	2	2		2	
		地域教育計画の事例研究	2	2	2		
応用実習	都市圏実習	2	2	2			
	異文化圏実習	2	2	2			
総括評価	教職実践プレゼンテーションⅠ	1	1		1		
	教職実践プレゼンテーションⅡ	2	2		2	2	

## 【資料 2-1-3】授業科目の概要（『履修の手引き』より抜粋）

3 教育実践研究科授業科目の概要			
教職実践専攻＜学習開発コース・学校力開発コース＞			
科目区分	授業科目	単位	授業科目の概要
教育課程	特色あるカリキュラムの開発 Distinctive Curriculum Development	2	今日教師の専門的力量的のひとつとして強く求められている、子どもや地域の実態をふまえた特色あるカリキュラムの開発に向けて、その土台となる教育課程の自主編成・民主編成の理念を理解するとともに、カリキュラムの開発・運営・評価に関する具体的な課題と方法論の基礎を修得する。演習を軸に、テーマに応じてペアワークやグループワークなどの実践的な学習やビデオ視聴を取り入れながら進める。授業の終わりに5分～10分を振り返りの時間を設け、学習の確認を図る。また、授業のまとめとしてレポート発表会を設け、共有化を図る。
	カリキュラムの評価と今日的課題 Curriculum Evaluation and Today's Tasks	2	カリキュラムの評価とその今日的課題について、「Ⅰ学習指導要領の変遷と評価」、「Ⅱカリキュラム評価に関わる事例と課題」、「Ⅲカリキュラム評価の実際と課題」の3つのテーマを設定して学習する。まずⅠでは、学習指導要領の解説も含め、近年の国内外の学力調査の考え方と調査結果をもとにカリキュラムの評価と課題を明確にする。Ⅱでは、科学教育及び環境教育の諸外国のカリキュラム・スタンダード等を事例とし、我が国との比較から今日的課題について考察する。Ⅲでは、実態調査とその結果を踏まえ、各学校でのカリキュラム評価の実際と問題点を理解し、その改善方法について検討する。
教科指導	授業実践の記録・分析と校内研修 Recording & Analysis of Classes and In-School Training	2	授業実践を量的及び質的な側面から把握する実践的な知見を、ストップモーション方式の授業分析法を中心に学ぶ。実際の授業場面及び授業ビデオから記録を作成・分析する演習を行うことで、授業分析法を活用できるようにする。また、連携協力校の授業研究会において、学んだ授業分析法による校内研修を運営する活動に参加する。授業記録を教員集団の有効な共有情報としての確に活用し、授業改善の方法を考えることができるようにする。教室場面における児童生徒の学びの実態を把握する意義と方法について修得する。
	教材開発と児童生徒理解（言語系） Development of Teaching Materials and Child's Understanding (Language)	2	「各教科等における言語活動の充実」を図る観点から、児童生徒の言語の発達を踏まえつつ、「教科を貫く国語力」育成の観点から教材を開発し、各教科等の関連を図った年間指導計画や学習指導案を構築できるようにする。また、授業形態として、演習における討議を柱としつつ、協力校との連携のもと、授業作りのプロセスに即して校内研究に参加する機会を取り入れることで、PDCAのマネジメントサイクルを生かし、児童生徒の実態に応じて柔軟かつ連続的に授業改善を推進する力を養成する。
	教材開発と児童生徒理解（数理科系） Development of Teaching Materials and Child's Understanding (Math and Science)	2	児童生徒の確かな成長・発達と創造的な学力を保証する観点から、「数学的リテラシー」、「科学的リテラシー」等の育成を念頭に教材の開発や指導方法の改善を図り、学校現場における諸課題や様々な事例を構造的・体系的に捉える。算数・数学教育や理科教育等の理数系の授業に関して、新たな教材の開発や指導方法の改善を、模擬授業（マイクロティーチング）、事例研究、教材開発を駆使したPDCAサイクル（実践→省察→新たな実践）により実践的に行う。以上のような実践的な活動を通して、実践的な資質や能力を身に付ける。
教育相談	子どもの不適応への理解と支援 Understanding and Support for Child's Maladaptation	2	児童から思春期にかけての種々の不適応の問題（発達障害を含む）について、発達心理学及び臨床心理学の観点から理解を深め、学校における支援のあり方に関して、主要な理論を理解するとともに実践的な応用能力を獲得することを目標とする。支援のあり方について、支援ニーズに関するアセスメント及び支援方法の基礎をロールプレイング等を交えた演習形式で学び、授業の終盤には、受講者によって提供された事例を用いたケース・スタディを行い、それまで学習した不適応とその支援に関する理解を踏まえたディスカッションにより、知識の実践的活用につなげる。
生徒指導	学校カウンセリングの実践と課題 Practice & Tasks of School Counseling	2	三次的援助サービスとして、不登校などへの支援の実践的方法とともに、それを機能させる解決志向アプローチを学ぶこと、また、一次的・二次的援助サービスとして、問題を創り出さない日常のかかわりのあり方と具体的コミュニケーション技法を学ぶこと、それらを通して、学校における心理教育的援助サービスを包括的に機能させる方向性を、それぞれの学習者が獲得することを目標とする。基本的には演習を中心に進める。可能ならばLTD話し合い学習法を基本とした協同学習を行う。
学級経営・学校経営	学級経営とカリキュラムの開発 Class Management and Curriculum Development	2	学級づくり、「学級カリキュラム」、協働、市民的資質、子どもの学びと育ち、朝の会を中心とした学級活動、総合的な学習の時間等の在り方を通して、子どもたちの学びのプロセスの「履歴」としてのカリキュラムの在り方、子どもの「興味」を学級において相互交差させながら学びの道筋を創出していくカリキュラムづくりを、実践している学級における聴き取り調査と授業観察、海外の事例の分析・考察により修得させる。
	組織管理の実践と学校 Practice of Organizational Control at School	2	「教員の社会的役割と社会的・職業的倫理」「社会での学校教育の位置付け、役割、学校が抱える課題」「情報管理、労務管理、危機管理」「外部機関との連携」等について、講義、ケーススタディ、ワークショップ、実習を適宜採り入れ、発表・質疑などを積極的に行う双方向の学びにより学習し、学校における組織管理のための方策を修得する。課題別に、少人数のグループを構成し、実習、「発表準備→発表→まとめ」を繰り返す、議論を深めながら共通理解を図り、協働の実践力を育成する。

## ○学校における実習科目

教職専門実習Ⅰ～Ⅳのねらいは、

①課題を的確に把握できる力

対応を策定できる力

実践できる力

評価・活用・探求できる力

の育成を図ることである。実習科目の構成は、次の【資料 2-1-4】のとおりである。

## 【資料 2-1-4】教職専門実習Ⅰ～Ⅳの概要

教職専門実習Ⅰ	附属学校で3週間の実習を行う。実践研究における課題の把握と課題解決のための実践研究方法の修得を目的とする。
教職専門実習Ⅱ	連携協力校で、4週間の実習を行う。そのうちの1週間は、少子化が進む地域の小規模校で実施する。実習校で実践的課題を見だし、その対応策を構想することを目的とする。
教職専門実習Ⅲ	連携協力校で2週間の実習を行う。実践的課題の対応策を提案・実践し、その効果を検証することを目的とする。
教職専門実習Ⅳ	附属学校で1週間の実習を行う。それまでの実習を総括し、実践的課題の対応方法を評価・活用・探究できる力を育成することを目的とする。

平成 21 年度は、附属学校園のほか、小学校 9 校、中学校 4 校、高校 2 校を連携協力校としている。

## ○地域と連携した教員養成の質の保証

コース別選択科目「総括評価領域」として、「教職実践プレゼンテーションⅠ及びⅡ」を設定している（【資料 2-1-5】）。この科目の評価には、山形県教育委員会担当者も加わり、各年次学生の到達点と課題を評価する。学位論文を課さない代わりに、この科目によって、実践研究報告書を作成する。実践研究報告書の発表を中心として、個々の学生の到達度を評価し、その結果を基に、修了の可否を判定する。

## 【資料 2-1-5】教職実践プレゼンテーションⅠ及びⅡの概要

授業科目名	年・期	授業概要
教職実践 プレゼンテーションⅠ	1年 後期	1年次の総括を行い、自分にとっての「あるべき教師像」と2年次に向けた自らの実践的研究課題を明確化し、報告する。
教職実践 プレゼンテーションⅡ	2年 前後期 (通年)	学んだ内容や研究方法を駆使し、地域教育実践に関する課題について、各自の問題意識に応じた課題の実践的研究を進め、報告する。

なお、平成 21 年度は初年度であり、「教職実践プレゼンテーションⅠ」（1年次後期）を行った。1年次の各授業や実習を踏まえ、学生個々の実践的研究課題に対する成果を実践研究報告書にまとめ、さらに発表会を行った。（【資料 4-1-2】参照）

育成する教員の資質能力については、「学習開発コースの現職教員」、「学習開発コースの学部卒院生（ストレートマスター）」及び「学校力開発コースの現職教員」の3つに分けて、それぞれ到達指標を明らかにしている。これは本研究科の教育目標（教員像）を具体化したものである。教職実践プレゼンテーションⅠ及びⅡの評価は、この到達指標による。以下にこの3つの到達指標を示す。（【資料 2-1-6】、【資料 2-1-7】、【資料 2-1-8】）

## 【資料 2-1-6】「学習開発コース」ストレートマスターの学生を対象とした到達指標

表1 「学習開発コース」ストレートマスターの学生を対象とした到達指標

コース	教員像(教育目標)	求められる資質能力(項目)	到達目標
学 習 開 発 コ ー ス	多様な人々が互いに学び合う関係を構築できる	児童生徒の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の発達段階を踏まえながら、一人ひとりを理解しようとする。</li> <li>児童生徒を尊重し、子どもの多様な可能性に対して、期待を持つことができる。</li> </ul>
		人間関係の形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の個性を把握して、それぞれの発達を引き出すような豊かな人間関係を考究できる。</li> <li>望ましい集団の実現をめざして、児童生徒の自己実現を図るような指導ができる。</li> </ul>
		多様な児童生徒とのコミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>お互いの信頼関係を構築するため、多くの場で積極的に児童生徒と関わるができる。</li> <li>コミュニケーション能力を持ち、多様な個性を踏まえ、児童生徒とコミュニケーションを図ることができる。</li> </ul>
		学級経営	<ul style="list-style-type: none"> <li>相互に学び合い育ち合う関係を形成する学級経営について理解できる。</li> <li>児童生徒の実態や学級の状況を適切に把握し、経営プランを考えることができる。</li> </ul>
	確かな「授業力」を備え、地域の子どもの学力向上を支えられる	カリキュラムと授業の構想	<ul style="list-style-type: none"> <li>担当学年についての見通しを持ち、適切な目標を設定することができる。</li> <li>各学校の特色や児童生徒の学習状況を踏まえたカリキュラムの開発と評価を行うことができる。</li> </ul>
		教材開発	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科等の内容に関わる専門的・体系的な知識を有し、担当学年の内容にふさわしい教材を開発することができる。</li> <li>開発した教材を実践し、その評価をもとに改善を行うことができる。</li> </ul>
		指導形態・方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>確かな学力の保証のために、効果的な指導の方法や形態の工夫ができる。</li> <li>指導方法や形態に関する知識を有し、それを踏まえて、適切に活用し実践することができる。</li> </ul>
		学習評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の学習状況や履歴について、適切に評価を行うことができる。</li> <li>評価の結果をもとに、学習の改善のための工夫を行うことができる。</li> </ul>

注)到達目標は実際の学校現場での実施内容として記述している。実際の評価では、学修によって、到達目標に記述した内容に係る資質能力が身に付いたかを評価する。

## 【資料 2-1-7】「学習開発コース」現職教員の学生を対象とした到達指標

表 2 「学習開発コース」現職教員の学生を対象とした到達指標

コース	教員像(教育目標)	求められる資質能力(項目)	到達目標
学 習 開 発 コ ー ス	多様な人々が互いに学び合う関係を構築できる	児童生徒の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の発達段階を踏まえながら、一人ひとりを多面的に理解できる。</li> <li>児童生徒を尊重し、子どもの多様な可能性に対して、適切な期待を持つことができる。</li> </ul>
		人間関係の形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の個性を把握して、それぞれの発達を引き出すような豊かな人間関係を築くことができる。</li> <li>望ましい集団の実現をとおして、児童生徒の自己実現を図るような指導ができる。</li> </ul>
		多様な児童生徒とのコミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>多くの場で積極的に児童生徒と関わり、お互いの信頼関係を作ることができる。</li> <li>コミュニケーション能力を持ち、多様な個性を踏まえ、児童生徒と円滑なコミュニケーションを維持できる。</li> </ul>
		学級経営	<ul style="list-style-type: none"> <li>相互に学び合い育ち合う関係を形成する学級経営を心がけ、具体的な手だてを考究できる。</li> <li>児童生徒の実態や学級の状況を適切に把握し、経営プランをもって、学級経営上の課題解決に当たることができる。</li> </ul>
	確かな「授業力」を備え、地域の子どもたちの学力向上を支えられる	カリキュラムと授業の構想	<ul style="list-style-type: none"> <li>多学年にわたる見通しを持ち、適切な目標を設定することができる。</li> <li>各学校の特色や児童生徒の学習状況を踏まえたカリキュラム開発を行うことができる。</li> <li>児童生徒の学習状況から、カリキュラムの評価を行い、常に改善することができる。</li> </ul>
		教材開発	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科等の内容に関わる専門的・体系的な知識を有し、児童生徒の実態に即した教材を開発することができる。</li> <li>開発した教材を実践し、その評価をもとに改善を行うことができる。</li> </ul>
		指導形態・方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>確かな学力の保証のために、効果的な指導の方法や形態に関して提案することができる。</li> <li>指導方法や形態に関する知識とスキルを有し、児童生徒の実態に合わせ、それらの能力を適切に活用し実践することができる。</li> </ul>
		学習評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の学習状況や履歴について、多様な視点から評価を行うことができる。</li> <li>評価の結果をもとに、学習の改善のために適切な支援を行うことができる。</li> </ul>

注) 到達目標は実際の学校現場での実施内容として記述している。実際の評価では、学修によって、到達目標に記述した内容に係る資質能力が身に付いたかを評価する。

## 【資料 2-1-8】「学校力開発コース」現職教員の学生を対象とした到達指標

表3 「学校力開発コース」現職教員の学生を対象とした到達指標

コース	教員像(教育目標)	求められる資質能力(項目)	到達目標
学校力 開発 コース	学校と地域を開かれた関係で結び、確かなパートナーシップを築ける	教員の自立と使命感	・学校の本質的課題や現代学校改革等との関連で、教員のあるべき目標を設定し、説明できる。 ・社会人としての判断力と行動力を持ち、全体の奉仕者としての高い倫理観を持つことができる。
		学校と地域との連携	・地域との関連における学校・学校教育の役割を深く理解できる。 ・学校を拠点とした地域の教育力を高める取組みをすることができる。
		学校の安全と信頼	・学校や学級の教育活動を進める上で想定される危機状況を理解し、対応できる。 ・学校を安全な環境として保つことができる。
	豊かな「人間力」と社会性を備え、地域における学校力向上を支えられる	エンパワーメントとファシリテーション	・教員の資質向上を図る校内研修のプログラムを作成し、組織できる。 ・他の教員をリードする形で教育活動に取り組み、教員の資質改善に資することができる。
		学校経営	・学校の実状や課題を理解し、適切な経営を行う計画を立てることができる。 ・組織マネジメントに関する知識や知見を活用し、学校の教育活動をリードできる。
		社会性とコミュニケーション	・豊かなコミュニケーション能力を持ち、同僚や地域住民、保護者との信頼関係を構築できる。 ・教育実践者としての自己を反省的に捉え、学び続ける姿勢を持つことができる。

注)到達目標は実際の学校現場での実施内容として記述している。実際の評価では、学修によって、到達目標に記述した内容に係る資質能力が身に付いたかを評価する。

## ○指導体制

学生の実践研究指導及び履修指導は、山形大学大学院教育実践研究科委員会が、学生ごとに、主担当の研究指導教員と副担当の指導教員を定めている。この主担当と副担当の指導教員は、研究者教員と実務家教員を充て、学生が実践研究を進める上で、「理論と実践の融合」を図ることのできるような体制としている。

## ○修得単位数と授業科目の配置

現職教員(大学院設置基準第14条特例適用)は2年次に現任校に復帰することになるため、必修科目はできるだけ1年次に設定し、「共通科目」は全て1年次に設定している。

なお、1年次には38単位以上、2年次には7単位の修得を目安としている。

## ○現職教員の2年次の授業の履修に関する特例措置

大学院設置基準第14条に定める教育方法の特例を実施することとし、教育現場で活躍している現職教員に対し、教員としての身分を保有したまま履修できるように配慮し、土曜日・夏季休業・冬季休業期間を利用して授業を行うこととしている。(【資料 2-1-9】)

## 【資料 2-1-9】現職教員のための教育方法の特例措置(『履修の手引き』Ⅲ履修方法より)

## Ⅲ 履修方法

## 1. 授業時限及び特例措置

## (1) 授業時限

教育実践研究科の授業時限は、第1時限から第8時限までとする。

本研究科の授業時間割は、次のとおりとする。

授業時限	時間帯	校時
第1時限	8時50分～9時35分	1・2校時
2	9時35分～10時20分	
3	10時30分～11時15分	3・4
4	11時15分～12時00分	
5	13時00分～13時45分	5・6
6	13時45分～14時30分	
7	14時40分～15時25分	7・8
8	15時25分～16時10分	
9	16時20分～17時05分	9・10
10	17時05分～17時50分	

## (2) 現職教員のための教育方法の特例措置

大学院設置基準第14条に定める教育方法の特例を実施することとし、教育現場で活躍している現職教員に対し、教員としての身分を保有したまま履修できるものとする。

## ① 標準修業年限

標準修業年限は、14条特例を適用した場合でも2年とする。

## ② 履修指導等の方法

授業は、1年次は学修に専念するため平日開講の授業の受講とする。2年次は、平日、夜間と土曜日の開講を考慮する。

授業時限は、平日が、1年次1～10校時(8時50分～17時50分)、また、必要に応じて、2年次には11～14校時(18時～21時10分)の夜間や土曜日昼間に行く。さらに前期8月第3週及び後期3月第4週(1年次のみ)を集中講義期間、前期8月第1週及び後期12月第4週(2年次)に現職教員を対象とした補講期間を置き、長期休業期間を利用した履修を可能とする。

なお、2年次の学校における実習については、実習期間、現任校を離れて、実習に専念できる条件を整備している。

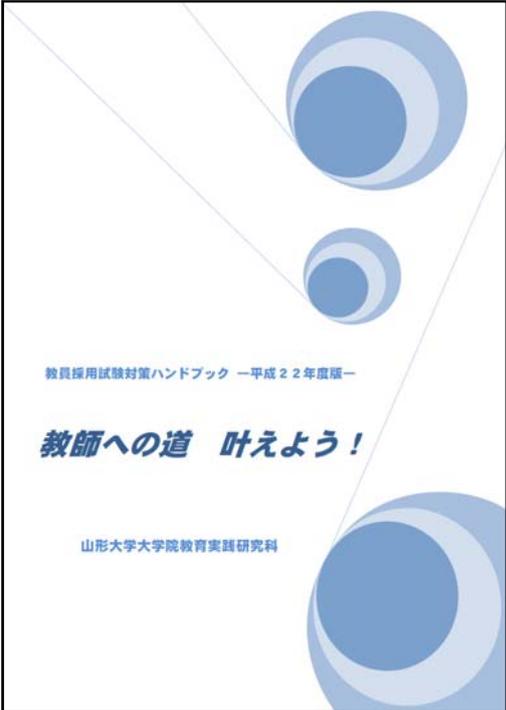
## 観点 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

### ○学生からの要請への対応

学部卒院生の教員採用試験対策として、本研究科に教員採用特別対策室を設置し、1年次から教員採用試験に備えるように、情報提供や個々の具体的な相談に応じるような体制をとっている。その具体例の一つとして、【資料 2-2-1】に示す教員採用試験対策ハンドブックを作成し、全員に配布している。

### 【資料 2-2-1】教員採用試験対策ハンドブック(表紙及び目次)

	<h2>目 次</h2>
1. はじめに .....	1
2. 教員の仕事の再確認 .....	1
3. 教員になるための条件 .....	2
4. 全国の教員採用試験	
(1) 概要 .....	3
(2) 主な都府市の平成21年度一次試験の期日 .....	3
(3) 主な試験科目 .....	3
(4) 平成21年度の実施状況 .....	3
(5) 過去10年間の受験者数等の推移 .....	4
5. 山形県の教員採用試験	
(1) 過去5年間の採用見込数の推移 .....	5
(2) 第一次選考試験の概要と留意点 .....	5
(3) 第二次選考試験の概要と留意点 .....	5
6. これからの受験対策のポイント .....	10
資料「平成22年度山形県公立学校教員選考試験実施要項」..... 資料1～19	

### ○社会からの要請への対応

前期に5つの共通科目と「教職専門実習Ⅰ・Ⅱ」を山形県教育委員会関係者に授業公開した。その際「公開の機会を今後も設けてほしい」、「よく学んでいるが、現職教員と学部卒院生(ストレートマスター)で授業参加の積極性に違いが見られる」、「学習指導要領をきちんと理解することが前提である」という意見が出された。

「教職実践プレゼンテーションⅠ」には、山形県教育委員会関係者が参画し、大学院の教員と共同で評価を行っている。

山形県教育委員会関係者への授業の公開と参加者については、次の【資料 2-2-2】に示すとおりである。さらに、この具体的事例として「教職専門実習Ⅰ」の公開に関して【資料 2-2-3】に示す。

## 【資料 2-2-2】教育委員会関係者への授業の公開と参加者

期間（年月日）	授業科目	参観者（人数）
平成 21 年 6 月 9 日 ～12 日	共通科目(5科目の授業)	義務教育課長、課長補佐 (2名)
平成 21 年 7 月 13 日 ～15 日	教職専門実習 I (山形大学附属小・中学校)	教育次長、課長補佐、指導主事(2名) (4名)
平成 21 年 12 月 4 日	教職専門実習 II (山形市立鈴川小学校)	義務教育課長 (1名)
平成 22 年 2 月 20 日	教職実践プレゼンテーション I	教育次長、義務教育課長、高校教育課長、教職員室主幹 (4名)

## 【資料 2-2-3】「教職専門実習 I」の公開について(お知らせ)

## 山形大学大学院教育実践研究科「教職専門実習 I」の公開について

## [ 附属小学校 ]

7 月 13 日 (月)

- 1 校時 ( 9:15～10:00) 4 年 授業者：相澤明菜  
 2 校時 (10:25～11:10) 2 年 3 組国語 授業者：山口絵理子または馬見新太郎  
 ※事後研は 13:00～13:45 (予定)

- 5 校時 (13:55～14:40) 4 年 授業者：及川渚  
 ※4 年生の授業及び事後研の詳細は、本日まで林間学校のため、明日以降、お知らせいたします。

## [ 附属中学校 ]

7 月 14 日 (火)

- 1 校時 ( 8:50～9:40) 3 年 4 組国語 授業者：岡村麻衣子  
 1 年 1・2 組体育 (水泳) 授業者：高橋郁子\*・船山直樹  
 2 校時 ( 9:50～10:40) ◎2 年 4 組社会 授業者：兼子崇\*  
 3 年 1 組理科 授業者：山本良\*  
 3 年 4 組英語 授業者：竹田靖\*  
 3 年 2 組国語 授業者：岡村麻衣子  
 1 年 3・4 組体育 (水泳) 授業者：高橋郁子\*・船山直樹  
 3 校時 (10:50～11:40) ◎3 年 4 組理科 授業者：山本良\*  
 1 年 3 組数学 授業者：山本貴史  
 3 年 3 組英語 授業者：滝澤直美  
 2 年 1・2 組体育 (水泳) 授業者：高橋郁子\*・船山直樹  
 4 校時 (11:50～12:40) 1 年 1 組数学 授業者：山本貴史  
 2 年 3・4 組体育 (水泳) 授業者：高橋郁子\*・船山直樹

7 月 15 日 (水)

- 1 校時 ( 8:50～9:40) ◎1 年 2 組数学 授業者：山本貴史  
 ◎3 年 1 組英語 授業者：竹田靖\*  
 ◎3 年 2・4 組体育 (柔道) 授業者：高橋郁子\*・船山直樹  
 2 校時 ( 9:50～10:40) ◎3 年 1・3 組保健 授業者：船山直樹・高橋郁子\*  
 ◎1 年 4 組数学 授業者：山本貴史  
 3 校時 (10:50～11:40) ◎3 年 4 組英語 授業者：滝澤直美  
 4 校時 (11:50～12:40) 3 年 2 組英語 授業者：滝澤直美

\*は、現職教員です。 ◎は、研究授業です。  
 事後研の時間は、当日、学校でご確認ください。

**(2) 分析項目の水準及びその判断理由**

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

## ○教育課程について

本研究科は、教育目的を達成するために、教員との履修相談を通じて、共通必修科目に加えて、指定された単位数をバランスよく履修するとともに、学生の研究課題や関心に合わせて選択科目を履修できるよう配慮している。よって、個人の研究課題や関心を踏まえて、目的とする教員としての高度な専門能力の育成において、期待に応えるものになっている。

## ○授業内容について

授業は、座学中心の講義ではなく、ほとんどの授業が調査・実習・実験等を含む演習であり、かつ教員としての実践力を向上させるための実習も重視し、本研究科の教育目的に沿った適切な内容となっている。

## ○学生や地域社会からの要請について

学生への授業評価アンケート調査の結果や各指導教員との相談により、学生の要望を反映した授業の在り方を検討している。

また、山形県教育委員会関係者への授業等の公開をはじめ、地域のニーズを取り入れた指導を行っている。学生の評価についても、山形県教育委員会の担当者が加わり、地域社会の要請に応える体制を構築している。

以上のことより、期待される水準にあると判断される。

**分析項目Ⅲ 教育方法****(1) 観点ごとの分析****観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫**

(観点到に係る状況)

## ○授業形態と指導の工夫

授業形態は、【資料 3-1-1】の通り、8割近くが演習形式であり、学生相互の討論やプレゼンテーション、協同的な活動など、学校現場を意識した実践的な授業が多くなっている。

**【資料 3-1-1】開講授業の形態：講義・演習・実習の比率**

	講 義	演 習	実 習	合 計
授業科目数	9	52	6	67
比 率 (%)	13%	78%	9%	100%

平成 21 年度 1 年次生を対象として開講された授業科目は、前期 26 コマ（この内、必修となる共通科目が 7 コマ）、後期 25 コマ（この内、必修となる共通科目が 4 コマ）で、合計 51 コマ（科目）ある（【資料 2-1-2】参照）。全体としての開講コマ数のバランスはとれているが、「共通科目」（必修）は、やや前期の開講授業が多くなっている。これは、前期に実施する「教職専門実習Ⅰ」（平成 21 年 6 月 29 日～7 月 17 日）にむけて、学生の「授業力」向上のために「教科等の実践的指導方法」の領域の科目 3 コマを前期に開講するように配慮したためである。

2 年間分の時間割として、【資料 3-1-2】に平成 22 年度時間割を示す。

【資料 3-1-2】平成 22 年度教育実践研究科時間割

平成22年度 大学院・教育実践研究科 時間割 [ 前期 ]												( 教育実践研究科・学生指導担当 2010.03.03 )				
曜日	学年	1-2校時(8:50~10:20)			3-4校時(10:30~12:00)			5-6校時(13:00~14:30)			7-8校時(14:40~16:10)					
		授業科目	教員	教室	授業科目	教員	教室	授業科目	教員	教室	授業科目	教員	教室	授業科目	教員	教室
月	1年				人間関係形成の実践と課題	佐藤(節)	共24	子どもの不道徳への理解と支援	藤岡	共14						
火	1年	社会と教員の在り方	平田・真木	共14	道徳教育の実践と課題	平田・伊藤	共24	*教科内容研究(倫理学領域)	藤川	研						
水	1年							*教科内容研究(国文学領域)	三上	研						
木	1年	教材開発と児童生徒理解(基礎系)	大澤	共14	特色あるカリキュラムの開発	藤井・渋谷	共24	*教科内容研究(物理学領域)	高井	研	*教科内容研究(初等・後進学領域)	田口	研	*教科内容研究(体育学領域)	越木(潔)	研
金	1年							*教科内容研究(国文学領域)	廣野	研	*教科内容研究(木材加工領域)	河合	研			
土	1年							*教科内容研究(国文学領域)	小原	研	*教科内容研究(化学・有機化学)	藤谷川	研			
土	1年										*教科内容研究(給食学領域)	小森	研			
土	1年	発達障害児の個別支援の実践と課題	藤井・三原(節)	共14	教材開発と児童生徒理解(実践系)	三原(節)	共23	脱臼学習過程と評価	出口・廣田	教士	学級経営とカリキュラムの開発					
土	1年							*教科内容研究(地学領域)	川邊	研						
土	1年							授業実践の記録・分析と校内研修	江間	共14	学校研究推進の実践と課題					
土	1年	△実習Ⅰ期間の授業等の補講			△実習Ⅰ期間の授業等の補講			△実習Ⅰ期間の授業等の補講			△実習Ⅰ期間の授業等の補講					
土	1年	発達障害児のコミュニケーション支援(前)	佐藤(節),藤井	共23	数理学教材開発プロジェクト実習	中野・大澤・越木(潔)	共21	学校改善プラン開発実習	出口・藤井・伊藤	共23	教職実践プレゼンテーションⅡ	全専任教員	共23			
土	1年	教員のキャリア形成	河野・渋谷	共14	算数系教材開発プロジェクト実習	河野・大澤・越木(潔)	共23									
土	1年				表現系教材開発プロジェクト実習	河野・大澤・越木(潔)	共22									
土	1年				社会・生活系教材開発プロジェクト実習	河野・大澤・越木(潔)	共24									
土	1年	教職専門実習Ⅰ(附属学校)	全専任教員		附小・中・高(3週間):平成22年10月29日(月)~11月16日(金)											
土	1年	発達障害児のコミュニケーション支援(後)	佐藤(節),藤井	共23	附特別支援(3週間):平成22年6月28日(月)~7月27日(金)											
土	2年	教職実践実習Ⅲ(連携協力校)	全専任教員		山形市内校(2週間):平成22年9月19日(月)~9月28日(火)											
土	2年	教職実践実習Ⅳ(附属学校)	全専任教員		附小(1週間):平成22年11月8日(月)~11月12日(金)											
土	2年	教職実践実習Ⅴ(連携協力校)	全専任教員		山形市内校(2週間):平成22年11月15日(月)~12月3日(金)											
土	2年	教職専門実習Ⅳ(附属学校)	全専任教員		附小(1週間):平成22年11月12日(金)~11月18日(木)											
土	2年	教職実践実習Ⅵ(連携協力校)	全専任教員		附中(1週間):平成22年11月8日(月)~11月12日(金)											

黄色の枠は必修科目

緑色の枠は学校力開発コースの必修科目

土曜日にも活用して授業を実施

平成22年度 大学院・教育実践研究科 時間割 [ 後期 ]

曜日	学年	1-2校時(8:50~10:20)			3-4校時(10:30~12:00)			5-6校時(13:00~14:30)			7-8校時(14:40~16:10)			9-10校時(16:20~17:50)		
		授業科目	教員	教室	授業科目	教員	教室	授業科目	教員	教室	授業科目	教員	教室	授業科目	教員	教室
月	1年	*教科内容研究(機械工学領域)	廣野	研	カリキュラムの評価と改善	中野(節)	共1	*教科内容研究(化学・工業)	藤井(学)	研	*教科内容研究(国文学領域)	金子	研	*教科内容研究(化学領域)	石井	研
火	1年	*教科内容研究(金属加工領域)	廣野	研	*教科内容研究(英語学領域)	佐々木	研	教職実践プレゼンテーションⅠ	全専任教員	共23	教材開発のための先進研究A	越木(潔)	A1	教材開発のための先進研究B	越木(潔)	A1
水	1年	(☆教材開発のための先進研究)	越木(潔)	A1	組織管理の実践と学校	菅高・真木	共14	学校カウンセリングの実践と課題	佐藤(節)	共23	数理学教科信用力リアクシー	中野・大澤・越木(潔)	共21	*教科内容研究(日本語学領域)	廣野	研
木	1年	(☆教材開発のための先進研究)	越木(潔)	A1	学校力とファンリレーション	佐藤(節)	共12	子どもの理解と事例研究	藤岡	共12	学校の安全と防災教育	村山	共23	社会・生活系教科信用力リアクシー	中野・大澤・越木(潔)	共23
金	1年				算数系教科信用力リアクシー	中野・大澤・越木(潔)	共21	小規模複式学校の実践と課題(前)	佐藤・渋谷	共23	理学と子ども支援	廣野・大村	共12	*教科内容研究(代数学領域)	越野	研
土	1年							学校融合の実践と課題	江間・廣野	共12				表現系教科信用力リアクシー	中野・大澤・越木(潔)	共14
土	1年	△実習Ⅱ期間の授業等の補講			△実習Ⅱ期間の授業等の補講			△実習Ⅱ期間の授業等の補講			△実習Ⅱ期間の授業等の補講					
土	1年							教職実践プレゼンテーションⅡ	全専任教員	共23						
土	1年	教職実践実習Ⅱ(連携協力校)	全専任教員		山形市内校(1週間):平成22年11月8日(月)~11月12日(金)											
土	1年	教職実践実習Ⅲ(連携協力校)	全専任教員		山形市内校(3週間):平成22年11月15日(月)~12月3日(金)											
土	2年	教職専門実習Ⅳ(附属学校)	全専任教員		附小(1週間):平成22年11月12日(金)~11月18日(木)											
土	2年	教職実践実習Ⅶ(連携協力校)	全専任教員		附中(1週間):平成22年11月8日(月)~11月12日(金)											

注1. (※)印の授業では、実習部分については別に日程調整を行う  
 注2. 「\*教科内容研究(○○領域)」は、「教材開発のための教科内容研究(○○領域)」  
 注3. 担当教員のイタリック表示は、地域教育文化学部または教職研究総合センター教員

○大学院における研究指導の工夫

「教材開発と児童生徒理解（数理系）」の授業では、現職院生と学部卒院生の混成チームで小学校算数の教材を開発し、附属小学校での実験授業を踏まえて、その成果の発表会を行っている。（【資料 3-1-3】）

【資料 3-1-3】

この部分は著作権の関係で掲載できません。

○シラバスにおける到達目標と成績評価基準の明確化、授業報告書での検証

各授業科目のシラバスは、「授業科目名（英文）」「担当教員名」などの基本情報とともに、次の項目が示され、WEB上で公開されている。（シラバスの例：【資料 3-1-5】）

- ・ 授業概要（テーマ、ねらい、目標 [到達目標]、キーワード）
- ・ 授業計画（授業の方法、日程）
- ・ 学習の方法（受講のあり方、予習のあり方、復習のあり方）
- ・ 成績評価の方法（成績評価基準 [C基準：合格に必要な最低限度を明示]、方法）
- ・ テキスト、参考書

これらは、各授業担当者から提出される授業報告書において、検証される。授業報告書は、「授業科目名」「担当教員名」の基本情報のほかに、次の項目を報告することに

なっている。（授業報告書の例：【資料 3-1-6】、【資料 3-1-7】参照）

- ・ 日程にそった授業実施日と実施時間（補講を含め、15 コマ 30 時間の保証）
- ・ 主な配付資料
- ・ 授業で示した課題（レポート）一覧
- ・ 本授業の到達目標に対する達成度及び授業の評価
- ・ 授業を実施しての担当教員のコメント

これらにより、院生の側に授業についての見通しを示すことができる一方、その科目について担当教員が責任を明確にすることができる。また、シラバスには、附属学校及び連携協力校の利用や、現地調査に関わる予定も、明示されている。

【資料 3-1-4】到達目標と授業科目の対応関係（『履修の手引き』より）

表 1 到達目標と授業科目（1）		到達目標と授業科目の対応関係を明示	
教員像（教育目標）	求められる資質能力（項目）	到達目標	授業科目
多様な人々が互いに学び合う関係を指導できる	児童生徒の理解	・ 児童生徒の発達段階を踏まえながら、一人ひとりを多面的に理解できる。 ・ 児童生徒を尊重し、子どもの多様な可能性に対して、適切な期待を持つことができる。	・ 子どもの不適応への理解と支援 ・ 発達障害児の個別支援の実際と課題、 ・ 脳科学と子ども支援 ・ 子ども理解の事例研究
	人間関係形成	・ 児童生徒の個性を把握して、それぞれの発達を引き出すような豊かな人間関係を築くことができる。 ・ 望ましい集団の実現をとおして、児童生徒の生き方と自己実現を図るような指導ができる。	・ 道徳教育の実際と課題、 ・ 人間関係形成の実際と課題
	多様な児童生徒とのコミュニケーション	・ 多くの場で積極的に児童生徒と関わり、お互いの信頼関係を作ることができる。 ・ コミュニケーション能力を持ち、多様な個性を踏まえ、児童生徒と円滑なコミュニケーションを維持できる。	・ 発達障害児のコミュニケーション支援 ・ 学校カウンセリングの実際と課題
	学級経営	・ 相互に学び合い育ち合う関係を形成する学級経営を心がけ、具体的な手だてを考究できる。 ・ 児童生徒の実際や学級の状況を適切に把握し、経営プランをもって、学級経営上の課題解決に当たることができる。	・ 学級経営とカリキュラムの関連 ・ 小規模複式学級の実際と課題
確かな「授業力」をの学力向上を支えられる	カリキュラムと授業の構想	・ 多学年にわたる見通しを持ち、適切な目標を設定することができる。 ・ 各学校の特色や児童生徒の学習状況を踏まえた教科カリキュラムの研究と開発を行うことができる。 ・ 児童生徒の学習状況から、カリキュラムの評価を行い、常に改善することができる。	・ 特色あるカリキュラムの構想、 ・ 数理系（言語系・表現系・社会生活系）教科開発のための教科内容研究
	教材開発	・ 教科等の内容に関する専門的・体系的な知識を有し、児童生徒の実際に応じた教材を開発することができる。 ・ 開発した教材を実践し、その評価をもとに改善を行うことができる。	・ 教材開発と児童生徒理解（言語系）、 ・ 教材開発と児童生徒理解（数理系）、 ・ 数理系（言語系・表現系・社会生活系）教科開発プロジェクト実習 ・ 教材開発のための先進研究A・B
	指導形態・方法	・ 確かな学力の保証のために、効果的な指導の方法や形態に関して提案することができる。 ・ 指導方法や形態に関する知識とスキルを有し、児童生徒の実際に合わせて、それらの能力を適切に活用し実践することができる。	・ 授業実践の記録・分析と校内研修 ・ 数理系（言語系・表現系・社会生活系）教科活用力とリテラシー
	学習評価	・ 児童生徒の学習状況や履歴について、多様な観点から評価を行うことができる。 ・ 評価の結果をもとに、学習の改善のために適切な支援を行うことができる。	・ カリキュラムの評価と今日的課題 ・ 認知学習過程と評価
表 1 到達目標と授業科目（2）		到達目標	授業科目
学校と地域を開かれた関係で結び、確かなパートナーシップを築ける	教員の自立と使命感	・ 学校の本質的課題や現代学校改革等との関連で、教員のあるべき目標を設定し、説明できる。 ・ 社会人としての判断力と行動力を持ち、全体の奉仕者としての高い倫理観を持つ。	・ 社会と教員の在り方 ・ 【異文化圏実習】
	学校と地域の連携	・ 地域との関連における学校・学校教育の役割を深く理解できる。 ・ 学校を拠点とした地域の教育力を高める取組みをすることができる。	・ 学卒融合の実際と課題 ・ 地域教育計画の事例研究
	学校の安全と信頼	・ 学校や学級の教育活動を進める上で想定される危機状況を理解し、対応できる。 ・ 学校を安全な環境として保つことができる。	・ 学校の安全と防災教育 ・ （組織管理の実際と学校）
豊かな「人間力」と社会性を備え、地域における学校力向上を支えられる	エンパワーメントとファシリテーション	・ 教員の資質向上をはかる校内研修のプログラムを作成し、組織できる。 ・ 他の教員をリードする形で学校の教育研究活動に取組み、教員の資質改善に資することができる。	・ 学校研究推進の実際と課題 ・ 学校力とファシリテーション
	学校経営	・ 学校の実際や課題を理解し、適切な経営を行う計画を立てることができる。 ・ 組織マネジメントに関する知識や知見を活用し、学校の教育活動をリードできる。	・ 組織管理の実際と学校 ・ 学校改善プラン開発実習
	社会性とコミュニケーション	・ 豊かなコミュニケーション能力を持ち、地域住民や保護者との信頼関係を構築できる。 ・ 教育実践者としての自己を反省的に捉え、学び続ける姿勢を持つ。	・ 教員のキャリア形成 ・ 【都市圏実習】

## 【資料 3-1-5】教育実践研究科のシラバスの例：「授業実践の記録・分析と校内研修」

## 授業実践の記録・分析と校内研修

Recording &amp; Analysis of Classes and In-School Training

担当教員：江間 史明(EMA Fumiaki)

担当教員の所属：山形大学大学院教育実践研究科（教職大学院）

開講学年：1年,2年 開講学期：前期 単位数：2単位 開講形態：演習

## 【授業概要】

## ・テーマ

授業記録は、あるがままの授業の事実をそのまま写し取るものではなく、記録者が自らの問題意識によって発見し、切り出して構成するものである。この意味で、授業を記録し分析する力量は、授業を見る力量と支え合う関係にある。本授業は、授業実践を量的及び質的な側面から把握する実践的な知見を、ストップモーション方式の授業分析法を中心に学ぶ。授業から記録を作成・分析する演習を行うことで、授業分析法を活用できるようにする。また、連携協力校の授業研究会において、学んだ授業分析法による校内研修を運営する活動に参加する。授業記録を教員集団の有効な共有情報としての確に活用し、授業改善の方法を考えることができるようにする。

## ・目標

- 1 授業ビデオを活用したストップモーション方式の授業記録を作成できる。
- 2 授業記録作成の実践的意義を理解できる。
- 3 校内研修に授業ビデオを活用する諸方法を理解し、その活用をリードできる。

## ・キーワード

授業分析、教室談話、ストップモーション方式、授業リフレクション、校内研修

## 【授業計画】

## ・授業の方法

○まず、授業研究の理論と歴史について概観する。特に、児童生徒の学びの実態をとらえる、定量的な分析とナラティブな質的な分析という二つの分析の特質を整理する。

○実際の授業分析にあたっては、ストップモーション方式の授業分析法を中心とする。これは、言語情報だけでなく、非言語情報や状況の描写をも記述し、記録の途中に適宜、記録者の分析コメントを挿入するものである。授業実践の個々の局面での児童生徒の思考と教師の思考を丁寧に記述していくことを試みるのに適した方法である。

○以上の理論研究のあと、実際の授業を受講生全員で参観し、ビデオに記録する。授業者をまじえたビデオを用いた検討会のあと、その授業の記録作成分析演習を行う。

○各自がて、記録者は、自分の記録を書き直す作業を繰り返す。記録検討のなかで出された点について各記録分析を作成し、ビデオ再生と照らし合わせながら、その記録の妥当性を全員で検討していく。検討をふまえ者が授業者にあてたコメントを書く。これに授業者返信コメントをよせてもらい、さらに検討をくわえる。

○連携協力校の授業研究会に参加し、校内研修における授業ビデオの活用と記録作成分析について学ぶ。

○最終レポートを作成、受講生全員で読み合うことで、各自の洞察をより深める機会とする。

## ・日程

第 1回：オリエンテーション／講義のねらい及び進め方についての説明

第 2回：授業分析の理論研究／稲垣忠彦、佐藤学『授業研究入門』（岩波書店）を使い、「反省的实践」概念を学ぶ。

第 3回：授業分析の理論研究／同上書を使い、日本の授業研究の歴史と現在の授業研究スタイルの背景を学ぶ。

第 4回：授業分析の理論研究／ストップモーション方式、授業リフレクションなど授業記録及び分析法の理論について、具体的な授業記録を検討しながら学ぶ（小学校）。

第 5回：授業分析の理論研究／上記の検討を中学校の実践記録で行う（中学校）。

第 6回：授業参観とビデオ記録／記録分析演習に使用する授業を参観し、ビデオに記録する。

第 7回：授業検討会／授業をビデオで見直しながら、授業者をまじえてストップモーション方式の検討会を行う。

第 8回：記録作成分析演習／ビデオをもとに各自が授業記録の作成と分析を行う。ビデオを再生しながら、各自の記録と分析を受講生全員で検討していく。記録者は、検討をふまえて自分の記録と分析を次回までに書き直してくる。（授業の導入分について。）

第 9回：記録作成分析演習／検討を続ける。展開部の前半について。

第10回：記録作成分析演習／検討を続ける。展開部の後半について。

第11回：記録作成分析演習／検討を続ける。授業の終末部分について。

第12回：記録者のコメント作成／完成した授業記録と分析に、各記録者がコメントを書いて授業者に送る

第13回：授業者の返信コメントを検討する／授業者の返信コメントを、ビデオと記録をもとに検討する。

第14回：連携協力校の授業研究会に参加／校内研修に参加し、ビデオや授業記録の活用の実際を学ぶ。

第15回：授業記録作成分析の「ふり返し」／校内研修と授業記録の機能についてレポートをまとめ、各自のレポートを読み合い、互いの洞察を交流し、深める機会とする。

**【学習の方法】****・受講のあり方**

授業をビデオに記録し、ビデオを用いた授業検討を行い、実際に記録を作成する。個人ないしチームでの事前準備の作業が多くなる。積極的に取り組んでほしい。個人情報扱いについては、講義のなかでも述べるが、十分留意すること。

**・予習のあり方**

次回までの文献ないし作業の課題に取り組むこと。事前準備がないと、参加しても得られるものはない。

**・復習のあり方**

一つの事例で学んだことを、これまでの自分の実践経験と結びつけて考察すること。関連づけられる事例を多くすることが、考察を深めることになる。理論語よりも、具体的なエピソードを大切にすること。

**【成績評価の方法】****・成績評価基準**

C(合格に必要な最低限度)基準:ストップモーション方式の授業記録を作成し、教師の教授行為と児童生徒の思考を関連させて、その特質を記述できる。

**・方法**

次の項目について、作成した授業記録及び最終レポート(ふり返し)等を中心に、担当教員が評価する。

- ・授業分析方法の理論的特質とその歴史についての理解
- ・作成した授業記録と分析、コメントの内容水準
- ・授業記録の検討および授業研究会に参加した際の議論の妥当性と積極性
- ・最終レポート(ふり返し)における気づきと考察

**【テキスト】**

- ・江間史明:「4章2節 記録をとり授業に生かす」「5章3節 ストップモーション方式の授業研究」守屋淳編『子どもとともに育つ技』ぎょうせい、2006年、p.169-173,199-204.
- ・稲垣忠彦・佐藤学:『授業研究入門』岩波書店、1996年

**【参考書】**

- ・江間史明:「中学校の授業研究は難しい?」『悠プラス』ぎょうせい、2007年11月号、p.118-121
- ・吉田新一郎:『校長先生という仕事』平凡社新書、2005年

## 【資料 3-1-6】授業報告書の記入例（説明用）

【大学院・教育実践研究科】					
＜記入例＞ 授業報告書(2009年度)					
授業報告 作成日：2010年 2月 22日		報告者：今村哲史		使用教室：C2	
科目名：カリキュラムの評価と今日的課題		担当教員：三浦登志一、今村哲史			
開講対象：教育実践研究科 1年		科目区分：必修(○)・選択( )			
開講学年：1年	開講学期：後期	単位数：2単位		開講形態：講義	
実施 回	内 容	実施日及び時間		時間数	備 考
		月 日(曜)	時 間		
1	・オリエンテーション ・近代日本の教育課程について	10月 7日(水)	13:00-14:30	2	
2	学習指導要領の変遷(昭和22年～現在まで)	10月14日(水)	13:00-14:30	2	
3	・学習指導要領の基本的考え方 ・世界的な学力調査の結果と今後の課題	10月21日(水)	13:00-15:15	3	
4	国内における学力調査の結果と課題1 ー教育課程実施状況調査結果からー	10月28日(水)	13:00-14:45	2+1/3	
5	国内における学力調査の結果と課題2 ー全国学力調査結果からー	10月31日(土)	13:00-15:00	2+2/3	
6	理科及び科学カリキュラムに関する世界的動向 1・2	11月 7日(土)	9:00-11:15	3	
7		月 日( )	—		
8	省略	月 日( )	—		
9		月 日( )	—		
10		月 日( )	—		
11	プレゼンテーションと討論	1月30日(土)	13:00-15:15	3	ここまで で30時 間分
12	授業のまとめー課題解決の方向性についてー	2月 3日(水)	13:00-14:30	2	
13	記入しない	月 日( )	—		
14		月 日( )	—		
15		月 日( )	—		
				総授業時間数(合計)	30時間
主な配布資料： ・中央教育審議会答申に関するプリント ・PISA 調査結果に関するプリント ・ ・ ・		課題(レポート等)一覧： ・日本の学習指導要領の変遷の概略をまとめる(レポート) ・PISA調査結果から考えられる日本の生徒の学力の特徴 ・ ・ ・地域や学校の特色を生かしたカリキュラム評価の実際の報告 ・聞き取り調査結果のまとめと考察(各グループ) ・日本のカリキュラムの今日的課題と改善案の提案について (プレゼンテーションと討論の結果)			
本授業の到達目標に対する達成度及び評価： ・到達目標(学習評価に関する資質能力の育成)については、ほぼ達成できたと考え ・授業を通して、全ての学生が各学校・学年の教育目標や児童生徒の学習状況等から、カリキュラム評価を行うと ともに、今日的課題について指摘し、改善策を提案することができた。この結果、学生全員がC基準以上の成果を上 授業を実施しての担当教員のコメント： ・本授業全体を通して、学生同士の活発な意見交換や討論が行われ、活気ある授業であった。 ・個々の学生については、もう少し主体的に文献を調査して授業に参加する姿勢が欲しいと感じた。 ・土曜日等、通常の時間以外でも授業を行ったが、学生にとっては、もう少し日程的にタイトにならないように工夫 する必要があり、今後の課題である。		到達目標に対する評価 は必ず記入して下さい。			
(注)各回の授業時間数は、「45分を1時間」として計算して記入(例:90分=2時間、120分=2+2/3時間)					

## 【資料 3-1-7】授業報告書の具体例：「授業実践の記録・分析と校内研修」

授 業 報 告 書 ( 2009年度 )					【大学院・教育実践研究科】	
授業報告 作成日：2009年10月24日		江間史明		共通14演		
科目名：授業実践の記録・分析と校内研修		担当教員：江間史明				
開講対象：教育実践研究科 1年		科目区分：必修(○)・選択( )				
開講学年：1年	開講学期：前期	単位数：2単位		開講形態：演習		
実施 回	内 容	実施日及び時間		時間数	備 考	
		月 日(曜)	時 間			
1	オリエンテーション	4月 17日(金)	13:00-14:30	2		
2	『授業研究入門』前半佐藤学執筆分の検討	4月 24日(金)	13:00-14:30	2		
3	『授業研究入門』後半部稲垣忠彦執筆分の検討	4月 28日(火)	14:40-16:10	2	補講	
4	『校長先生という仕事』吉田新一郎の検討	5月 1日(金)	13:00-14:30	2		
5	『子どもとともに育つ技』2, 3章の検討	5月 8日(金)	13:00-14:30	2		
6	『子どもとともに育つ技』4, 5章の検討	5月 12日(火)	14:40-16:10	2	補講	
7	授業取材 ビデオ撮影 附属小6年 林敏幸学級	5月 15日(金)	13:00-14:30	2	授業参観45分を含む	
8	林学級の授業 ストップモーション検討会	5月 15日(金)	17:00-18:30	2	補講	
9	林学級の授業記録作成 1	5月 22日(金)	13:00-14:30	2		
10	林学級の授業記録作成 2	6月 5日(金)	13:00-14:30	2		
11	林学級の授業記録作成 3	6月 12日(金)	13:00-14:30	2		
12	附小公開研で授業記録作成(1エピソードと考察)	6月 19日(金)	2授業を参観	2	参観とレポート	
13	教職専門実習 I で実施した授業研と記録の整理	7月 24日(金)	13:00-14:30	2		
14	教職専門実習 I で作成した授業記録の発表検討1	7月 31日(金)	18:00-19:30	2	水曜日程、補講	
15	教職専門実習 I で作成した授業記録の検討発表2	7月 31日(金)	19:40-21:10	2	水曜日程、補講	
				総授業時間数(合計)	30時間	
主な配布資料： ・授業記録の理論に関する補足資料プリント ・参観授業に関する教材文など		課題(レポート等)一覧： ・課題文献3冊についてのレポート(全員、毎回) ・林学級の授業記録と考察レポート作成(1人15分程度割り当て) ・附小公開研の授業について1エピソードの記録と考察レポート作成 ・教職専門実習 I の1授業の記録と考察(チームで作成)				
本授業の到達目標に対する達成度及び授業の評価： 到達水準 授業記録の作成と考察、授業ビデオを用いた事後検討に関する実践的な方法論は経験できた。他方、「子どもの事実から授業を分析する」という点については、院生の理解の水準には、十分達成できたと認められる者とそうでない者が認められた。						
授業を実施しての担当教員のコメント： 現職院生と学部卒院生が、同一の授業の記録と分析に取り組んだことは、双方にとって、有意義な学習の機会となった。他方、授業記録作成に関わる作業量の多さに関しては、負担に思う院生が一部に見られた。授業を「教師の知識伝達の場」とみる院生にとっては、授業の記録と分析の意義はなかなか理解されない。そのため、レポートの考察も不十分にとどまり、作業の負担感が増す悪循環になる。この一部の院生指導が今後の課題である。						
(注)各回の授業時間数は、「45分を1時間」として計算して記入(例:90分=2時間、120分=2+2/3時間)						

各院生に対する研究指導（「教職実践プレゼンテーションⅠ」の指導方法）

教職実践プレゼンテーションⅠでは、各院生に研究者教員と実務家教員がペアとなり主担当及び副担当の研究指導教員として指導を行った。また院生は、研究内容をもとに「かかわりづくり」「教材づくり」「児童生徒理解」「学校力」の4分野（グループ）に別かれて、1年目の実践研究をまとめ、発表会を行った（【資料 3-1-8】。なお、それぞれの発表題目は【資料 4-1-2】参照）

【資料 3-1-8】「教職実践プレゼンテーションⅠ」のグループ分け

No.	学籍番号	学生氏名	教員免許・教科	研究指導教員		グループ				
				主担当	副担当	かかわりづくり	教材づくり	児童生徒理解	学校力	
1			小・中国・高国	三浦登志一	藤岡久美子	○				
2			小・中社	江間史明	佐藤節子	○				
3			小・中国・高国	三浦登志一	今村哲史		○			
4			小・中国・高国	江間史明	三浦登志一			○		
5			小	今村哲史	真木吉雄	○				
6			高国	宮島新一	平田俊博		○			
7			小・中英・高英	藤岡久美子	三浦登志一			○		
8			中英・高英	出口 毅	佐藤節子			○		
9			小・中英・高英	平田俊博	三浦登志一			○		
10			小・中社	出口 毅	佐藤節子			○		
11			小・中保体・高保体	齋藤英敏	村山良之	○				
12			小	江間史明	齋藤英敏		○			
13			小	齋藤英敏	江間史明	○				
14			中数・高数	大澤弘典	真木吉雄		○			
15			中社・高社	真木吉雄	江間史明				○	
16			小・中英	齋藤英敏	江間史明				○	
17			中国・高国	三浦登志一	平田俊博				○	
18			小	真木吉雄	村山良之				○	
19			小	真木吉雄	出口 毅				○	
20			中保体・高保体	佐藤節子	藤岡久美子		○			
21			中理・高理	佐藤節子	大澤弘典			○		
(注) *印:現職教員						合計(人)	5	5	6	5

(緑枠)実務家教員

(黄色)研究者教員

**観点 主体的な学習を促す取組**

(観点に係る状況)

○力量形成のための主体的な学習の取組み（【資料 2-1-3, 3-1-5】参照）

各授業においては、少人数やグループでの活動が多く、次のような指導方策を用いながら、学生の主体的な学習を促している。

- ・学校現場と大学との往還を具体化する課題解決型の授業
- ・フィールドワーク、ロールプレイ、事例研究、アクションリサーチなどの実践的方法の導入
- ・学部卒院生（ストレートマスター）と現職教員の学び合い

○履修指導と単位の実質化

学生指導担当教員や教育実習担当教員を中心に、オリエンテーションや説明会を実施し、履修指導や実習の事前事後指導を行っている。また、各指導教員も、担当学生に対して、それぞれ専門性や学生個々の課題や実状を踏まえ、履修や研究の指導を行い、単位の実質化を図っている。（【資料 3-2-1】）

○実習期間中の授業の代替時間の確保

1年次には、合計7週間、2年次は3週間の教職専門実習（I～IV）がある。この期間の代替授業時間について、学生指導担当教員が土曜日を中心とした代替の時間割を作成し、授業時間の確保に努めている。学生には、各学期の始めにオリエンテーションを行い、代替の時間割について説明をしている。その際の資料を【資料 3-2-1】に示す。

TAとしての指導

学部卒院生（ストレートマスター）は、地域教育文化学部の授業のティーチングアシスタント（TA）として、「教材開発研究」（小学校教員養成プログラム）の授業科目でコメントを行った。その様子については【資料 3-2-2】に示すとおりである。

## 【資料 3-2-1】実習期間中の授業の代替時間の確保（学生オリエンテーション資料より）

平成21年 9月30日

山形大学大学院  
教育実践研究科学生 各位研究科・学生指導担当  
今村 哲史

## 平成21年度「教職専門実習Ⅱ」期間中の授業について

平成21年度「教職専門実習Ⅱ」（後期）期間中の授業については、下記の補講日程を設定しましたので、各自確認して下さい。

尚、最終的な授業日程については、各授業担当者とは相談し、確定することとなります。

\*[教職専門実習Ⅱ] 平成21年11月9日(月)～12月4日(金)

## 1. 授業日について

基本的に10月中旬以後の土曜日及び冬季休業等を中心に実施する。具体的な実施日程は、下記の「(1)代替の授業日」及び「(2)上記日程以外での授業の実施について」にもとづいて行う。

## (1)代替の授業日について

基本的に10月以後の土曜日及び冬期休業中を代替授業日とし、日程は次の通りです。

授業曜日	①11月9日～ 11月13日分	②11月16日～ 11月20日分	③11月24日～ 11月27日分	④11月30日～ 12月4日分
月曜日	10月17日(土)	12月25日(金)	1月8日(金)	2月13日(土)
火曜日	11月7日(土)	12月26日(土)	1月9日(土)	2月16日(火)
水曜日	12月12日(土)	12月28日(月)	1月11日(月)	2月17日(水)
木曜日	*10月15日(木)	1月6日(水)	1月23日(土)	2月18日(木)
金曜日	12月19日(土)	1月7日(木)	*1月15日(金)	2月19日(金)

(注)閉鎖期間:12月29日(火)～1月3日(日)

- ・1月30日(土)は、午後から地域教育学科の「教材開発研究」の発表会
- ・2月6日(土)は、終日、地域教育学科「卒論発表会」

## (2)上記日程以外での授業の実施について

## ①上記日程以外の代替可能な日について

日曜、祝祭日(国民の休日)等でも、場合によっては授業を行うこともある。

(但し、受講生と相談し決定する。)

<上記日程外日の例>

- ・日曜日、祝祭日(国民の休日) ・1月4日(月)、5日(火)
- ・10月24日(土)及び1月30日(土)の午前は可能
- ・2月22日(月)23日(火)、24日(水)(午前中まで可能かも?)、等

## ②平日の空き時間(コマ)の利用(前期同様)

## ③附属幼稚園(10月31日(土))及び特別支援学校(11月27日(金))の公開研究会 の活用

## 2. その他、留意事項

## (1)教室の暖房について

土、日等の休日及び12月29日～1月3日の期間は、館内の暖房がありません。個々にストーブ等を事務(総務)から借りて、教室内の暖房については対応することとなります。(暖房期間:12月1日から3月末までを予定)

【資料 3-2-2】

この部分は著作権の関係で掲載できません。

## 学習環境の整備

本研究科では、学生指導室として4室を設け、学生個々に机が用意されている。さらに学生指導室には、合わせて30台のパソコンが整備され、ホワイトボードやミーティング用のテーブルも設置している。休日にも建物及び学生指導室に出入りできるように全学生にセキュリティカードを持たせており、これらの設備等を利用した自主的な学習の環境を整えている。また、本学附属小・中学校にも、学生指導室を設け、合計20台のノートパソコンを準備している。（【資料3-2-3】）

## 【資料3-2-3】学生用ノートパソコンの整備状況

配置場所	配置台数	合計
大学内・学生指導室1（学習開発コース）	20台	30台
大学内・学生指導室2（学校力開発コース）	10台	
附属小学校・中学校内・学生指導室	20台	20台

## (2)分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

## ○学習指導法の工夫

「理論と実践の融合」を図る教育の実現の観点から、講義を少なくし、演習形式での授業を多くしている。また、研究者教員と実務家教員がティームティーチングの形式で相互に話題の提供を行ったり、グループ・ディスカッションや全体討論等において交互にアドバイスを行う等、効果的な指導が見られる。さらに、実技指導、模擬授業、ロールプレイ、ワークショップ、事例研究、フィールドワーク等を導入した授業が行われている。附属学校園の授業の参観や連携協力校での実習を取り入れるなど、より実践的な場面を想定した学習指導が行われている。例えば、「小規模複式学級の実践と課題」や「発達障害児のコミュニケーション支援」では、学校現場での実習も含まれている。

また、「授業実践の記録・分析と校内研修」では、附属学校の授業を学生全員で参観し、ビデオに記録して、授業記録の作成と分析を、附属学校教員も加えて、協同で実施した。

多くの授業で、課題が与えられ、その報告に基づいた討論や話し合いが行われている。

## ○主体的な学習の促進

指導教員は、各授業の充実を図るために、履修及び研究内容に関して授業時間以外にも、参考書・資料の紹介、履修・研究の進捗状況の把握など、多面的に指導している。また、学生指導室や各院生用のパソコン等の学習環境を整備している。

以上のことより、期待される水準にあると判断する。

## 分析項目Ⅳ 学業の成果

## (1) 観点ごとの分析

## 観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

## ○単位取得状況

1年次終了時における各学生の平均取得単位数を次の【資料 4-1-1】に示す。この結果、2年次に履修する必修科目（2年次、学習開発コース：5単位、学校力開発コース：7単位が必修）を除いて、全ての学生が修了に必要な単位を取得している。

【資料 4-1-1】 1年次における平均取得単位数

	共通科目	学校実習 科目	コース別 選択科目	総括評価	合計
修了要件単位数	20	10	12	3	45
1年次平均取得単位数 (平成 21 年度入学生)	20.2	7.0	14.1	1.0	42.3
最高取得単位数	20	7	24	1	52
最低取得単位数	20	7	10	1	38

## ○学生の研究課題に対する取り組みとその成果

各授業や実習をとおして見いだした実践的な研究課題について、「教職実践プレゼンテーションⅠ」の授業の中で明確化し、これまでの学習の成果とともに「実践研究報告書」とにまとめている。（【資料 4-1-2】、【資料 4-1-3】）

## 【資料 4-1-2】実践研究報告書題目（山形大学教育実践研究科年報・第1号より）

## 実践研究報告

## [学びのかかわりづくりグループ]

相澤明菜	国語科における交流活動を取り入れた授業づくりー言語力育成のためにー	22
岡崎友香	児童の既有経験とイメージに基づいた授業づくりー理科を中心としてー	30
荒川美佐子	かかわりの中で自己の生き方を考える授業づくり ー他者とのかかわりと言語力育成ー	38
船山直樹	保健体育科における一人一人に応じた指導と評価の在り方 ールーブリックを用いた高校三年におけるネット型球技(バドミントン)の実践からー	46
山口絵理子	一人ひとりが生きる学級経営の在り方 ー少人数教育の良さを生かしてー	54

## [学びの教材づくりグループ]

及川 渚	教材を見つける目を持ち授業に活かすことができる教師を目指して ー複数教材の視点からー	62
岡村麻衣子	高等学校国語における参加意欲を高める授業づくり ー夏目漱石の「こころ」を題材にしてー	70
馬見新太郎	個の学びを支える教材づくりー小4国語科の読書単元開発を通してー	78
山本貴史	中学校数学科における数学的コミュニケーションの促進について ー収束的発話場面を促進させる教材開発に関する考察ー	86
高橋郁子	「いのちを考える日」活性化のためにープチハンドブック作成と実践ー	94

## [学校力グループ]

兼子 崇	生きる力の育成に向けたつながりのある教育活動の在り方 ー教員間の意識の共有化を基盤とした取り組みー	102
佐藤義紀	地域とかかわり手をつなぐ 豊かな学校づくりを求めて ー学校間ネットワークを大切にした連携プランの策定と実践ー	110
信夫京子	「言語技術」を取り入れた教育実践への提言 ー「思考力・判断力・表現力」を高めるためにー	118
鈴木博志	働きがいのある学校づくりー校内ファシリテーターによる同僚性の構築ー	126
白田克幸	小学校キャリア教育カリキュラムの策定と実践化のためのマネージメントの方策 ー地域社会の教育力を生かした取り組みを通してー	134

## [児童・生徒理解グループ]

早坂和重	学習意欲が高まる授業づくり ー話し合いを支える教師の在り方ー	142
高橋美衣	外国語活動における今日的課題の検討 ーことばへの気づきをうながす外国語活動にむけてー	150
瀧澤直美	生徒一人ひとりの学習意欲を高める教師の働きかけー英語の実践を中心にー	158
竹田 靖	リスニング活動を意識した授業づくり ー山形県立K高校での教職専門実習研究報告ー	166
大沼沙貴	子どもの思考によりそうこと	174
山本 良	コミュニケーション力を育成する授業・学校 ー協同学習による実践から考察するー	182

【資料 4-1-3】

この部分は著作権の関係で  
掲載できません。

<b>観点 学業の成果に関する学生の評価</b>
--------------------------

(観点に係る状況)

○授業評価アンケートによる学習の振り返り

各学期の授業終了後に「授業評価アンケート」(【資料 4-2-1】)を行い、各授業の評価とともに、自身の学習成果について評価を行っている。その結果は、【資料 4-2-2】及び【資料 4-2-3】のとおりであった。前期及び後期ともに、どの質問項目においても 4.0 前後(1～5の5段階の尺度)であり、おおむね良好であった。

○教職専門実習の成果に対する自己評価

教職専門実習においては、実習の前後で、「実習研究計画書」の記入にあたって、到達指標に対する自己評価を行っている。その結果、徐々に学生の達成度は向上してきている。学生の到達度の変化については、【資料 4-2-4】に示すとおりである。また、学生の自己評価の具体的事例については、【資料 4-2-5】のとおりである。

さらに、授業においては、到達目標を基にした評価基準を設定しており、授業の成績評価は、学生が身につけた資質能力を表しており、修得した能力の証明となっている。

○実践研究報告書に基づいた評価

教職実践プレゼンテーション I では、各学生の研究課題を中心とした1年間の学習の成果をまとめて、実践研究報告書を作成し、発表を行っている。

○「学校力開発コース」(現職院生)を対象とした「学校における教育実習」の工夫

「学校力開発コース」は、教育課程編成などにおいて学校の教育力を活性化できる豊かな人間性を備えた教員の養成を目指している。このため、教職専門実習 I (附属学校)では、学校力開発コースの院生を中心に学部卒院生を加えた4人チームを編成し、実習を行うようにした。この結果、「到達指標」にそくした各院生の自己評価を統計的に分析すると、①リーダーシップ、②ファシリテーション(学部卒院生への指導助言や「ねらい」に向けて活動することへの支援など)において、自己評価の変化に有為差を確認できた。この結果と分析については、『山形大学大学院教育実践研究科年報』第1号(2010年2月)(【資料 4-2-4】)に、「異なるコースの大学院生がチームを編成した実習とその成果」としてまとめている。

## 【資料 4-2-1】平成 21 年度教育実践研究科 「授業評価アンケート(前期)」

## 平成 21 年度 教育実践研究科 授業評価アンケート(前期)

## I. 基礎データ

別紙・用紙に[ コース・現職教員/ストレートマスター・男女 ]を番号で答えて下さい。

## II. 授業評価について

あなたが受講した前期の授業に関して、後の各設問項目について、以下の評価規準表に示した5段階で評価し、その数字を別紙に記入して下さい。また、特に感想や意見があれば、「その他」の欄に記入して下さい。

評価規準表

規準	1 (-) ←←←←	2 ←←←←←	3 ←← →→	4 →→→→→	5 →→→→ (+)
参考 となる 用語 等	全く思わない	あまり思わない	どちらとも言えない	やや思う	そう思う
	適切でない	やや適切でない	どちらとも言えない	まあまあ適切	適切
	不満	やや不満	どちらとも言えない	ある程度満足	満足
	できなかった	あまりできなかった	半分くらいできた	まあまあできた	できた
	0～19%	20～39%	40～59%	60～79%	80～100%

## 1. 授業(実習も含む)内容について

(1) 到達目標の達成度について

- ① 本学期的授業全体を通して、あなたは、コースの到達目標を十分達成できたと思いますか。  
 ② コースの到達目標を達成するために、各授業は、十分効果的であったと思いますか。  
 ③ 各授業は、『履修の手引き』(p3-4)にある到達目標を達成するために、ふさわしい内容であったと思いますか。

(2) 各授業(実習も含む)について(達成目標との関わりも含めて)

- ④ 授業の目標を達成するために、授業日程は適切だったと思いますか。  
 ⑤ 授業の目標を達成するために、授業内容は適切だったと思いますか。  
 ⑥ 授業のレベル(難一易)は、あなたにとって適切だったと思いますか。  
 ⑦ 授業内容は、量的に(多一少)適切だったと思いますか。  
 ⑧ 授業の目標を達成するために、授業の課題やレポートは適切であったと思いますか。  
 ⑨ 授業の目標を達成するために、教員の指導は適切であったと思いますか。  
 (複数の教員で指導する場合には、その指導体制も含む)  
 ⑩ 授業において取り入れられた、グループ活動等は有効であったと思いますか。  
 ⑪ 各授業に対するあなたの満足度を答えて下さい。

(3) 学習状況等(実習も含む)

- ⑫ 各授業を受けるにあたって、あなた自身の準備は十分にできていましたか。  
 ⑬ 各授業での学生同士の協動的な活動やコミュニケーションは良好だったと思いますか。  
 ⑭ 各授業での協動的な活動や学習は、あなたにとって役立ったと思いますか。  
 ⑮ 各授業におけるあなた自身の学習状況を1～5の5段階で自己評価して下さい。

## 2. 各人の研究課題について

- ① 授業は、自分自身の研究課題を明確にするのに役立ったと思いますか。  
 ② 実習は、自分自身の研究課題を明確にするのに役立ったと思いますか。  
 ③ 授業や実習を通して、自身の研究課題を明確にすることができましたか。  
 ④ 研究課題を検討する上で、教員の指導・支援は適切だったと思いますか。

## 3. 各授業(実習も含む)に対する感想や意見

各授業に関する感想や意見がありましたら、授業ごとに簡潔に書いて下さい。

○授業に対する評価について

前期の授業評価アンケートの結果（【資料 4-2-2】）から、次の項目でおおむね高い評価を得ている。

1. 授業（実習を含む）内容について
  - (1)-③：「各授業は、『履修の手引き』（p3-4）にある到達目標を達成するために、ふさわしい内容であったと思いますか。」（4.00）
  - (2)-④：「各授業に対する満足度」（4.04）
2. 各人の研究課題について
  - ④：「研究課題を検討する上で、教員の指導・支援は適切だったと思いますか」（3.92）

後期の授業評価アンケートの結果（【資料 4-2-3】）では、全ての項目の平均値が 4.00 以上であり、高い評価を得ている。また、ほとんどの項目で前期に比べて平均値が高くなっており、学生が各授業により意欲的に取り組んでいたことがわかる。特に、設問項目 1.(2)-④：「各授業におけるあなた自身の学習状況を 1～5 の 5 段階で自己評価して下さい。」では、平均値が 4.28 であり、前期（3.77）に比べ向上している。また、各人の研究課題に関する項目では、全て 4.30 以上となっており、自身の研究への意欲や成果が現れている。

【資料 4-2-2】平成 21 年度（前期）授業評価アンケート結果

科目区分	設問No.	授業科目名 / 受講者数	設問1（授業内容について）																	設問2（各人の研究課題）				平均
			(1)到達目標の達成度			(2)各授業について								(3)学習状況等										
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	
共通科目	教育課程	特色あるカリキュラムの開発	21	3.29	3.29	3.24	2.67	3.05	3.14	2.57	2.57	3.19	2.76	3.10	2.95	3.43	3.33	3.29	3.65	3.83	3.35	3.93	3.19	
	教員等の指導方法	授業実践の記録・分析と校内研修	21	3.29	3.52	3.76	2.52	3.48	3.43	2.52	2.67	3.48	3.81	3.29	3.33	4.14	4.14	3.57	3.50	3.42	3.37	3.56	3.41	
		教材開発と児童理解(言語系)	17	3.65	3.94	4.06	4.18	4.24	4.06	4.24	3.94	4.53	4.18	4.29	3.65	4.41	4.12	3.88	3.94	4.00	3.87	4.31	4.09	
	生徒指導	教材開発と児童理解(数理系)	6	4.33	4.83	4.83	4.83	5.00	4.67	4.83	4.83	5.00	4.83	5.00	4.33	5.00	5.00	4.33	4.00	3.80	4.00	4.67	4.64	
		子どもの不適応への理解と支援	21	3.48	3.81	3.95	4.14	4.14	4.00	4.00	3.90	4.24	4.00	4.14	3.67	4.19	4.14	3.76	3.70	3.75	3.53	3.75	3.91	
	学級経営	学級経営とカリキュラムの開発	21	3.33	3.52	3.33	3.95	3.48	3.62	3.86	3.81	3.43	3.67	3.67	3.81	3.90	3.95	3.52	3.05	3.42	3.32	3.56	3.59	
教員の在り方	社会と教員の在り方	21	3.19	3.00	2.76	4.14	2.71	3.14	3.57	2.76	2.71	3.38	3.00	3.29	4.10	3.67	3.24	2.50	3.08	2.89	2.88	3.16		
学校実習科目	教職専門実習Ⅰ	21	3.55	3.65	3.70	3.57	3.48	3.38	3.52	3.29	4.10	4.29	3.81	3.57	4.57	4.43	3.95	4.00	4.15	3.81	4.05	3.84		
コース別選択科目	学習開発コース	発達障害児の個別支援の実際と課題	7	3.57	3.86	4.14	3.71	4.57	4.00	4.43	4.14	4.57	3.43	4.29	3.57	3.71	3.43	4.29	3.43	3.40	3.57	3.43	3.87	
		認知学習過程と評価	11	3.00	3.36	3.55	4.45	3.82	3.36	3.36	3.64	4.00	3.55	3.64	3.45	4.09	4.00	3.45	3.50	2.83	3.00	3.13	3.54	
		道徳教育の実際と課題	8	3.38	2.75	3.25	4.00	2.75	3.13	4.00	3.63	3.00	3.25	3.25	3.25	3.88	3.63	3.13	3.25	3.14	3.00	2.88	3.29	
		教材開発のための教科内容研究(応何学領域)	1	3.00	3.00	3.00	2.00	2.00	2.00	1.00	3.00	4.00	3.00	3.00	2.00	5.00	5.00	2.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.11	
		教材開発のための教科内容研究(物理学領域)	1	-	-	-	5.00	5.00	2.00	5.00	5.00	5.00	3.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00	3.00	4.00	3.00	4.00	3.81	
		教材開発のための教科内容研究(国語学領域)	4	3.75	3.75	4.25	4.50	4.50	3.75	4.25	4.25	4.50	4.25	4.25	3.50	4.25	4.25	3.75	3.50	3.00	3.33	3.50	3.95	
		教材開発のための教科内容研究(漢文学領域)	2	4.00	4.00	5.00	4.50	5.00	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.50	5.00	5.00	4.00	4.00	5.00	5.00	5.00	4.68	
		教材開発のための教科内容研究(英文学領域)	2	3.50	3.50	3.50	4.00	4.50	3.00	3.50	3.50	4.50	4.00	3.50	2.50	3.50	3.50	4.00	3.50	4.00	3.50	4.00	3.66	
		教材開発のための教科内容研究(衣・住生活領域)	3	4.00	4.50	5.00	5.00	5.00	4.67	4.33	4.33	5.00	5.00	5.00	4.33	5.00	5.00	5.00	4.00	4.00	4.33	4.50	4.63	
		教材開発のための教科内容研究(絵画領域)	8	3.43	4.14	4.43	4.75	4.50	4.00	4.50	4.75	4.88	3.75	4.63	4.00	4.38	4.25	3.88	3.71	3.33	3.17	3.80	4.12	
教材開発のための教科内容研究(体育学領域)	7	3.71	4.43	4.43	4.57	4.71	4.29	3.86	4.00	4.71	4.43	4.57	4.14	4.57	4.43	4.29	4.17	4.00	3.50	4.25	4.27			
学校力開発	学校力開発	人間関係形成の実際と課題	13	4.15	4.46	4.77	4.69	4.85	4.31	4.54	4.62	5.00	4.85	4.92	4.23	4.92	4.77	4.38	4.15	4.43	4.17	4.80	4.58	
		学校研究推進の実際と課題	7	3.86	4.57	4.57	4.86	4.71	4.33	4.57	4.43	5.00	4.00	4.86	4.43	3.43	4.57	4.29	4.00	4.00	3.86	4.17	4.34	
		地域教育計画の事例研究	9	3.44	4.33	4.44	4.67	4.67	3.25	3.78	3.89	4.33	4.67	4.56	4.11	4.78	4.89	3.89	3.78	3.67	3.56	4.14	4.15	
平均値				3.57	3.82	4.00	4.12	4.10	3.62	3.87	3.91	4.28	3.96	4.04	3.66	4.24	4.20	3.77	3.70	3.69	3.64	3.92	3.90	

※評価規準：1(全く思わない)～5(そう思う)の5段階

到達目標の達成にふさわしい内容か

各授業の満足度

教員の指導の適切さ

【資料 4-2-3】平成 21 年度（後期）授業評価アンケート結果

科目区分	設問No.	授業科目名 / 受講者数	設問1 (授業内容について)															設問2 (各人の研究課題)				平均		
			(1)到達目標の達成度					(2)各授業について					(3)学習状況等											
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	①	②	③	④			
共通科目		カリキュラムの評価と今日の課題	21	3.62	4.05	4.10	4.24	4.14	3.71	4.19	4.33	4.29	4.38	4.10	3.67	4.19	4.19	3.81	3.80	4.07	3.75	3.94	4.03	
		学校力コンサルティングの実践と課題	21	3.86	4.05	4.19	4.10	4.14	4.24	3.80	3.70	4.10	4.48	4.14	3.71	4.29	4.19	4.05	3.63	3.69	3.79	3.69	4.00	
		組織管理の実践と学校	21	3.57	3.78	3.81	4.14	3.86	3.67	4.14	4.10	3.81	4.38	3.76	3.52	4.43	4.14	3.76	3.37	3.77	3.53	3.69	3.85	
		学校の安全と防災教育	21	3.38	3.14	3.14	3.43	2.95	3.19	3.33	3.52	3.38	3.29	3.24	3.38	3.67	3.52	3.43	2.68	3.23	2.95	2.94	3.25	
学校実習科目		教職専門実習Ⅱ	21	3.85	4.00	3.80	4.10	3.90	3.90	3.85	3.85	4.45	4.00	4.30	3.85	4.30	4.15	4.05	4.44	4.47	4.50	4.56	4.12	
コース別選択科目	学習開発コース	数理系教科活用力とリテラシー	2	3.50	3.00	3.00	4.00	4.00	3.00	3.50	3.50	4.50	3.00	4.00	3.00	3.00	3.00	4.00	4.50	5.00	4.50	4.50	3.71	
		言語系教科活用力とリテラシー	8	4.50	4.50	4.63	4.88	4.50	4.38	4.50	4.50	4.63	4.38	4.63	4.38	4.63	4.75	4.38	4.43	4.50	4.43	4.60	4.53	
		表現系教科活用力とリテラシー	1	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	
		脳科学と子ども支援	2	4.50	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.00	5.00	4.00	4.00	4.50	5.00	4.50	4.50	4.50	4.50	4.50	4.68
		教科開発のための教科内容研究(代数学領域)	1	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	3.00	3.00	5.00	5.00	3.00	4.00	4.00	3.00	3.00	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.32
		教科開発のための教科内容研究(国文学領域)	1	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00
		教科開発のための教科内容研究(英文学領域)	2	4.00	4.00	4.50	4.50	4.50	4.00	4.50	5.00	5.00	5.00	4.50	4.00	4.50	4.50	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.55
		教科開発のための教科内容研究(芸術・芸術領域)	5	4.00	4.00	4.20	4.40	4.20	4.00	4.40	4.40	4.60	4.20	4.60	4.00	4.60	4.60	4.60	3.40	3.75	3.80	3.75	3.75	4.18
		教科開発のための先進研究A(科学・技術)	15	3.69	3.92	3.85	3.00	3.77	3.85	3.85	3.85	3.69	2.92	3.85	3.69	2.83	2.92	3.77	3.15	3.20	3.38	3.17	3.17	3.49
		教科開発のための先進研究B(文化・社会)	9	4.33	4.50	4.67	3.00	4.67	4.50	4.67	4.67	4.33	4.17	4.50	4.00	4.33	4.33	4.67	4.50	4.67	4.75	4.50	4.50	4.41
		学校力開発コース	子ども理解の事例研究	4	4.50	4.50	4.25	4.75	4.50	4.75	4.75	4.75	4.75	3.75	4.50	4.50	4.25	4.50	4.50	4.25	4.67	4.25	4.25	4.47
			小規模複式学級の実践と課題	2	4.50	5.00	5.00	4.50	5.00	4.50	4.50	5.00	4.50	3.50	5.00	4.50	4.00	4.50	5.00	4.50	5.00	4.50	4.50	4.61
学社融合の実践と課題	2		4.50	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.50	5.00	5.00	5.00	5.00	4.00	5.00	5.00	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.84		
学校力とファシリテーション	8		4.75	4.88	4.75	4.75	4.88	5.00	5.00	4.75	5.00	5.00	5.00	4.63	5.00	5.00	4.75	4.75	4.67	4.75	4.63	4.84		
応用実習		都市実習	4	4.00	4.00	3.75	3.75	4.00	4.00	3.75	3.75	4.25	3.75	4.25	4.00	4.25	4.00	4.25	5.00	4.50	4.50	4.33	4.11	
総括評価		教職実践プレゼンテーションⅠ	21	3.70	3.65	3.55	3.50	3.20	3.75	3.50	3.35	3.95	3.15	3.60	3.80	3.95	3.85	3.90	4.45	4.40	4.45	4.35	3.78	
		平均値		4.18	4.28	4.29	4.29	4.34	4.16	4.23	4.38	4.49	4.06	4.38	4.02	4.20	4.22	4.28	4.30	4.43	4.35	4.33	4.28	

※評価規準：1(全く思わない)～5(そう思う)の5段階

自身の学習状況の評価

各人の研究課題に対する取り組み

## 【資料 4-2-4】教職専門実習 I の到達度評価の分析

(三浦登志一、他：「異なるコースの大学院生がチームを編成した実習とその成果」、『山形大学大学院教育実践研究科年報』、第 1 号、pp12-19.より抜粋)

## ② 自己評価における変化の分析

実習前及び実習終了時に実施した学校力開発コースの現職院生(7人)と学習開発コースの学部卒院生(11人)の5段階の自己評価を1点～5点として得点化し、各到達指標について対応のあるt検定により、評価の変化を分析した。なお、サンプルの少ない学習開発コースの現職院生(3人)は分析から除外した。

## ① 現職院生における変化

実習開始直前と実習終了直後での院生の自己評価の変化を表したのが、図1である。

実習前後で有意差が確認できたのは、「学校の本質的な課題や現代学校改革等との関連で教員のあるべき目標を設定し、説明できる(項目1)」(平均値 2.00→2.57;  $t(6) = 2.83, p < .05$ )、「教員の資質向上を図る校内研修プログラムを作成し、組織できる(項目7)」(平均値 1.71→2.43;  $t(6) = 2.50, p < .05$ )および「他の教員をリードする形で教育活動に取組み、教員の資質改善に資することができる(項目8)」(平均値 1.86→2.86;  $t(6) = 3.24, p < .05$ )の3項目である。また、「地域との関連における学校・学校教育の役割を深く理解できる(項目3)」と「組織マネジメントに関する知識や知見を活用し、学校の教育活動をリードできる(項目10)」の2項目で有意傾向(平均値 1.86→2.29, 1.71→2.14; ともに  $t(6) = 2.12, p < .10$ )がみられた。

学校力開発コースに実習で期待した3点のうち、①リーダーシップ、②ファシリテーションについては、自己評価に変化がみられたことがわかる。ただし、明らかな変化がみられたものについては、実習後の平均値は2点台にとどまっておらず、学生自身は実習前も含めて厳しい見方をしていることも明らかである。今後の実習により、評価の高まりがさらに現れるかを検討する必要がある。

## ② 学部卒院生における変化

図2は、学部卒院生での自己評価の変化を示したものである。

「担当学年について見通しを持ち、適切な目標を設定することができる(項目9)」(平均値 1.82→2.36;  $t(10) = 3.46, p < .01$ )、「各学校の特色や児童生徒の学習状況を踏まえたカリキュラムの開発と評価を行うことができる(項目10)」(平均値 1.64→2.27;  $t(10) = 3.13, p < .05$ )、「確かな学力の保証のために効果的な指導の方法や形態の工夫ができる(項目13)」(平均値 1.91→2.45;  $t(10) = 3.46, p < .01$ )、「指導方法や形態に関する知識を有し、それを踏まえて、適切に活用し実践することができる(項目14)」(平均値 1.82→2.18;  $t(10) = 2.39, p < .05$ )の4項目で有意差があった。また、「児童生徒の発達段階を踏まえながら、一人ひとりを理解しようとする(項目1)」(平均値 2.45→2.91;  $t(10) = 1.84, p < .10$ )、「コミュニケーション能力を持ち、多様な個性を踏まえ、児童生徒とコミュニケーションを図ることができる(項目6)」(平均値 2.73→3.27;  $t(10) = 2.20, p < .10$ )および「開発した教材を実践し、その評価をもとに改善を行うことができる(項目12)」(平均値 2.18→2.64,  $t(10) = 1.84, p < .10$ )の3項目で前後の評価差に有意な傾向がみられた。

学部卒院生が実習体験によってカリキュラムの理解や授業づくり、指導形態・方法の工夫、あるいは児童生徒理解において向上が図られたことは明らかである。また、その変容には、現職院生の省察からわかるように、擬似的な「学年集団」を運用し、学部卒院生の授業実習や授業研究会をリードした現職院生の考え方や行動が反映されていることも十分に看取できる。この点は、大学や実習校の教員等の他者評価を考慮するとともに、チーム編成が困難な教職専門実習 II における評価の変化と比較することで、今後、さらに検討してみたい。

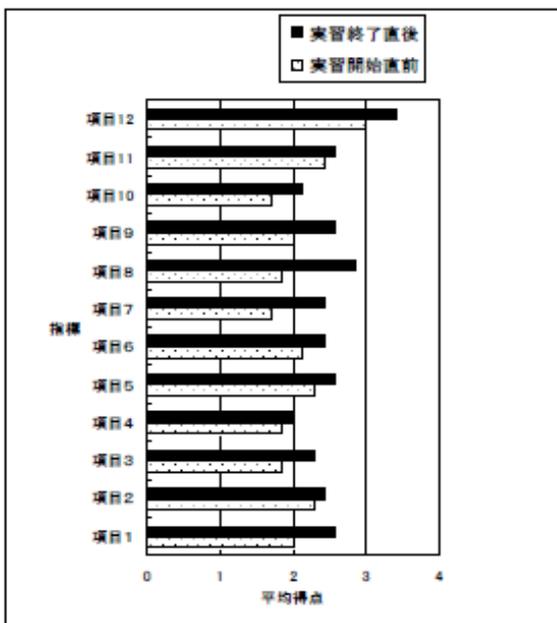


図1 現職院生における自己評価の変化

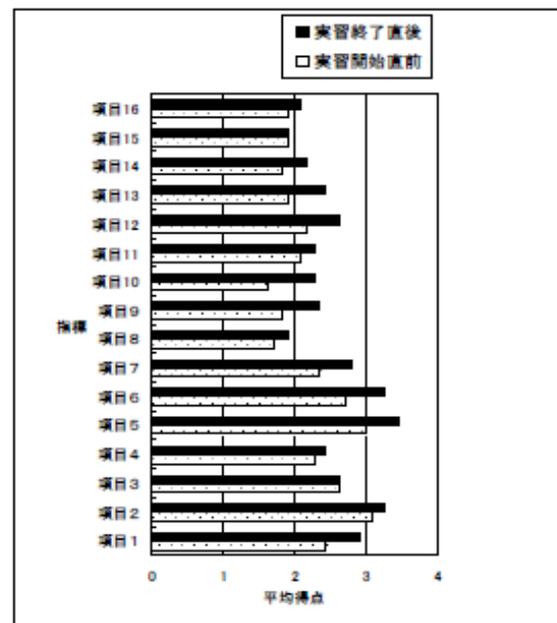


図2 学部卒院生における自己評価の変化

## 【資料 4-2-5】 到達指標に対する自己評価の具体例

## 実習自己評価書 (教職専門実習Ⅱ)

(1) 到達指標の自己評価 (実習後) ※5段階での自己評価 (低, 1⇔5, 高)

【「学習開発コース」ストレートマスターの学生を対象とした到達指標】記入日 平成21年 12月 11日 金曜日

コース	教員像(教育目標)	求められる資質能力(項目)	到達目標	自己評価
学習開発コース	多様な人々が互いに学び合う関係を指導できる	児童生徒の理解	・児童生徒の発達段階を踏まえながら、一人ひとりを理解しようとする。 ・児童生徒を尊重し、子どもの多様な可能性に対して、期待を持つことができる。	1・2・3・④・5 1・2・③・4・5
		人間関係の形成	・児童生徒の個性を把握して、それぞれの発達を引き出すような豊かな人間関係を考究できる。 ・望ましい集団の実現をめざして、児童生徒の自己実現を図るような指導ができる。	1・2・③・4・5 1・2・③・4・5
		多様な児童生徒とのコミュニケーション	・お互いの信頼関係を構築するため、多くの場で積極的に児童生徒と関わることができる。 ・コミュニケーション能力を持ち、多様な個性を踏まえ、児童生徒とコミュニケーションを図ることができる。	1・2・③・4・5 1・2・③・4・5
		学級経営	・相互に学び合い育ち合う関係を形成する学級経営について理解できる。 ・児童生徒の実態や学級の状況を適切に把握し、経営プランを考えることができる。	1・2・3・④・5 1・②・3・4・5
	確かな「授業力」を備え、地域の子どもの学力向上を支えられる	カリキュラムと授業の構想	・担当学年についての見通しを持ち、適切な目標を設定することができる。 ・各学校の特色や児童生徒の学習状況を踏まえたカリキュラムの開発と評価を行うことができる。	1・2・③・4・5 1・②・3・4・5
		教材開発	・教科等の内容に関わる専門的・体系的な知識を有し、担当学年の内容にふさわしい教材を開発することができる。 ・開発した教材を実践し、その評価をもとに改善を行うことができる。	1・2・3・④・5 1・2・③・4・5
		指導形態・方法	・確かな学力の保証のために、効果的な指導の方法や形態の工夫ができる。 ・指導方法や形態に関する知識を有し、それを踏まえて、適切に活用し実践することができる。	1・2・③・4・5 1・②・3・4・5
		学習評価	・児童生徒の学習状況や履歴について、適切に評価を行うことができる。 ・評価の結果をもとに、学習の改善のための工夫を行うことができる。	1・②・3・4・5 1・②・3・4・5

注) 到達目標は実際の学校現場での実施内容として記述している。実際の評価は、学修によって、到達目標に記述した内容に係る資質能力が身に付いたかを評価する。

## (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準にある。

(判断理由)

## ○学習の成果

1年次取得単位数の結果から、1年次必修科目の他、各学生の課題に沿った学習ができてきている。また、「実践研究報告書」より、各学生の研究課題への取り組みが順調に進められていることがわかる。

## ○自己評価

学生の「授業評価アンケートの結果」及び「実習研究計画書」の到達指標の自己評価の結果から、各授業と実習の経験を重ねるにつれて、自身の学習への意欲や成果が現れてきており、到達指標に対する評価も徐々に向上している。

このことより、期待される水準にあると判断できる。

分析項目Ⅴ 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

**観点 卒業(修了)後の進路の状況**

(観点に係る状況)

(該当なし。本研究科は、平成 21 年度開設のため、まだ修了生が出ていない。)

**観点 関係者からの評価**

(観点に係る状況)

(該当なし。本研究科は、平成 21 年度開設のため、まだ修了生が出ていない。)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(該当なし。本研究科は、平成 21 年度開設のため、まだ修了生が出ていない。)

## 質の向上度の判断

### 事例1 明確な目標設定と実践力育成のための教育課程（分析項目Ⅰ）

（質の向上があったと判断する取組）

本研究科では、「養成する教員像（教育目標）」として4項目を示し、それを具体化した「求められる資質能力」、そしてそのための「到達目標」を学部卒院生と現職教員に分けて『履修の手引き』に記し、各院生が常に到達目標を目指して学習することができるようになっている（【資料 2-1-6～2-1-8】）。さらに、到達目標と各授業との関係も示し（【資料 3-1-4】）、各授業をとおして教育目標（教員像）の実現を図るようになっている。

また、学生個々が授業で学んだことや個人の研究課題について追究してきた成果の総括評価として、1年次及び2年次修了時に「教職実践プレゼンテーションⅠ及びⅡ」を設定している（【資料 2-1-5】）。ここでは、自分にとっての「あるべき教師像」と2年次に向けた自らの実践的研究課題の明確化し、さらに、学んだ内容や研究方法を駆使し、地域教育実践に関する課題について、各自の問題意識に応じた課題の実践研究を進めた成果を「実践研究報告書」にまとめている（【資料 4-1-2】、【資料 4-1-3】）。

### ②事例2 教育内容・方法改善のための取り組み（分析項目Ⅱ）

（質の向上があったと判断する取組）

FDの取り組みとして、教職大学院や教員養成に関わる教員研究会をはじめ、学外研修会への参加、授業等の公開、山形県教育委員会との意見交換など、数多くの取り組みを行ってきた（【資料 1-2-1】、【資料 2-2-2～2-2-3】）。これにより、教員の教職大学院に対する理解と認識が深まってきている。また、教育内容や方法の改善のために、本研究科独自の授業評価アンケート及び授業報告書の作成を行い、授業改善に役立たせようとしている。アンケートや報告書は100%提出されており（【資料 1-2-2】）、改善に向けた意識は高いと言える。

### ③事例3 「学習指導法の工夫」（分析項目Ⅲ）

（質の向上があったと判断する取組）

授業においては、「理論と実践の融合」を図る教育の実現の観点から、講義を少なくし、演習形式での授業を多くしている（【資料 3-1-1】）。また、研究者教員と実務家教員がチームティーチングの形式で相互に話題の提供を行ったり、グループ・ディスカッションや全体討論等において交互にアドバイスをを行う等、効果的な指導が見られる。さらに、実技指導、模擬授業、ロールプレイ、ワークショップ、事例研究、フィールドワーク等を導入した授業が行われている（【資料 2-1-3】、【資料 3-1-3】）。附属学校園の授業の参観や連携協力校での実習を取り入れるなど、より実践的な場面を想定した学習指導が行われている（【資料 3-1-5】）。

また、研究指導においても、研究者教員と実務家教員がペアとなり、理論と実践の両面から指導を行っている（【資料 3-1-8】）。

### ④事例4 授業及び実習の成果と授業改善への手だて（分析項目Ⅳ）

（質の向上があったと判断する取組）

授業については、「授業評価アンケート」を実施し、その結果を各指導教員にフィードバックして、次年度以降の授業改善のための有益な情報としている。学生の授業に対する評価や満足度は概ね良好である（【資料 4-2-1～4-2-3】）。

教職専門実習終了後には、到達指標に対する自己評価を行い、学生も自身の到達度を理解するようになっている。これまでの結果からは、実習の経験を重ねるにつれて、到達度が徐々に向上してきており、成果が現れてきている（【資料 4-2-4】、【資料 4-2-5】、【資料 4-1-2】、【資料 4-1-3】）。